

—国道212号中津道路道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

きたこびわ のだ
北小枇杷遺跡・野田遺跡

2007

大分県教育庁埋蔵文化財センター

—国道212号中津道路道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

きた こ び わ の だ
北小枇杷遺跡・野田遺跡

2007

大分県教育庁埋蔵文化財センター



中津日田道路空中写真

序 文

本書は、大分県教育委員会が国道212号中津道路道路改良工事に伴い、大分県土木建築部
中津土木事務所の依頼を受けて実施した北小枇杷遺跡及び野田遺跡の発掘調査報告書です。

本遺跡が所在する中津市犬丸地区では、縄文時代の諸田遺跡をはじめ、弥生時代・古墳時
代の犬丸川流域遺跡群、上畑成遺跡など数多くの遺跡があり、先人たちの足跡をたどること
ができます。

今回報告する北小枇杷遺跡からは、周辺で暮らしていた人々の生活の様子を窺い知ること
のできる遺物が、また、野田遺跡からは、古墳時代から奈良時代の集落跡などが発見され、
この地域の人々の生活の営みを明らかにすることができました。

本書が、埋蔵文化財の保護並びに地域の先人の生活を理解する資料として、さらには、学
術研究の一助として活用されれば幸いです。

最後になりましたが、調査に御協力いただいた関係各位に、衷心から感謝申し上げます。

平成19年 3月30日

大分県教育庁埋蔵文化財センター所長
小 玉 学 司

例 言

- 1、本書は、平成16年度に実施した国道212号中津道路道路改良工事に係る北小枇杷遺跡・野田遺跡の発掘調査報告書である。
- 2、調査は、大分県教育委員会が大分県中津土木事務所から依頼を受け実施した。
- 3、北小枇杷遺跡の遺跡・遺構の実測と撮影は、調査担当者の高橋 徹・権藤 聡子が行った。また、野田遺跡については、調査担当者の恒賀健太郎・下田 智隆が主に行った。
遺物の実測及びトレースは大分県教育庁埋蔵文化財センターで行った。
- 4、北小枇杷遺跡の遺構写真撮影は、高橋・権藤で撮影を行い、野田遺跡の遺構写真は恒賀・下田で行った。
また、空中写真は、北小枇杷遺跡・野田遺跡ともに写測エンジニアリング株式会社に、基準点、水準点測量は松本技術コンサルタント株式会社に委託した。野田遺跡については、遺構実測等の調査支援を有限会社九州文化財リサーチに委託した。
- 5、本書で用いた方位はすべて磁北である。
- 6、本遺跡の出土遺物並びに図面・写真等は、大分県教育庁埋蔵文化財センターに保管している。
- 7、本書の執筆は、第3章を高橋 徹・権藤 聡子が担当し、第4章を恒賀健太郎・下田 智隆が担当した。また、その他の執筆及び編集は高橋 徹・恒賀健太郎が行った。

目 次

第1章 はじめに	1
第2章 遺跡の立地と環境	2
第3章 野田遺跡	3
第1節 報告にあたって	3
第2節 発掘調査の記録	4
第3節 遺構と遺物	7
第4節 まとめ	35
第4章 北小枇杷遺跡	40
1. 発掘調査の概要	40
2. 出土遺物	40
3. まとめ	41

第1章 はじめに

1. 調査にいたる経過

北小枇杷遺跡・野田遺跡は、大分県中津市大字犬丸に所在する。これらの遺跡の調査は、中津日田道路（国道212号中津道路）道路新設改良工事に係る、緊急発掘調査として実施した。

中津日田道路は、中津市の北側を走る中津高田線に沿って諸工場が広がる工業地帯と日田市を結ぶ地域高規格道路として新規整備を予定されているものである。

大分自動車道、東九州自動車道及び重要港湾中津港へのアクセス強化を図り、周防灘地域地方生活圏（中心都市：中津市・宇佐市）と日田玖珠地方地域生活圏（中心都市日田市）の物流等を整備することで、県北地域の振興、流通範囲の拡大に伴う産業の活性化が期待されている。

これまでこの計画に伴い、大分県土木建築部建設政策課を通じ中津土木事務所から、中津港線、中津道路、耶馬溪道路と路線整備に向けた事前の分布調査の依頼を受け確認調査、本調査を実施してきた。

北小枇杷遺跡については、平成14年度末の分布調査の際、対象地域が犬丸川流域遺跡群に近接することから、遺跡の可能性が高いと判断されたため、用地買収終了後平成16年度に野田遺跡の本調査と並行して試掘調査を実施した。この結果、須恵器数点と土師器数点を確認したため、県中津土木事務所と協議し、本調査を実施することになった。

野田遺跡については、平成14年度末に県中津土木事務所から中津道路の事前分布調査の依頼があり、対象地域が周知遺跡である上畑成遺跡の南側にあたることから試掘調査が必要であると判断されたため、平成15年度の上畑成遺跡の本調査に伴い、正連寺・野田地区の試掘調査を用地買収後の平成15年度末に県中津土木事務所の依頼を受け、実施した。

調査の結果、溝状遺構と、数基の土坑、柱穴を検出したため、県中津土木事務所と協議し、確認された部分について本調査を実施することとした。

2. 調査団の構成

調査主体	大分県教育委員会	
調査総括	大分県教育長	深田秀生
	大分県教育庁埋蔵文化財センター所長	伊藤正行（平成16年度）
	同	渋谷忠章（平成17年度）
	同	小玉学司（平成18年度）
	同 次長兼総務課長	益永孝則（平成16、17年度）
	同	岡本義博（平成18年度）
	同 調査第一課長	高橋 徹（平成16年度）
	同	栗田勝弘（平成17、18年度）
	同 主幹	高橋信武（平成16、17、18年度）
調査員	大分県教育庁文化課参事（文化財班総括）	高橋 徹（調査担当）
	同 主事	恒賀健太郎（調査担当）
	徳島県鳴門市教育委員会生涯学習課 事務吏員	下田智隆
	大分県教育庁埋蔵文化財センター 嘱託	権藤聡子

第2章 遺跡の立地と環境

1. 地理的環境 (第1図)

中津市は大分県の最北部に位置し、北は遠浅の海が開け周防灘から瀬戸内海に連なり、西は山国川を挟み福岡県と接する。東は宇佐市と接し、南は旧耶馬溪町を介して玖珠町、旧山国町を介して日田市と接する。

中津市北部は、旧中津市西部にあたり、沖積平野で占められ、旧中津市中央部には、洪積台地が広がる。旧中津市東部には、中央部から広がる洪積台地の「下毛原台地」と宇佐市から西に広がる「長峰台地」の間に旧三光村に位置する八面山から犬丸川が流れ、小沖積層を形成する。

北小枇杷遺跡・野田遺跡は、大分県中津市大字犬丸の標高約16mの台地上に位置し、北小枇杷遺跡は、犬丸川に沿って広がる河岸段丘の地形の起伏谷部に位置し、野田遺跡は、「長峰台地」の西端、旧海岸線沿線に位置する。

また、野田遺跡は南側に緩やかに傾斜する地形であったことが分かっているが、昭和期に実施された圃場整備事業により犬丸天満宮を軸とする北東から南西に走る微高地が、一部大きく切り開かれ、傾斜から犬丸川まで現状の水田が広がっている。

野田遺跡の南側に確認されている谷部の対岸にあたる場所が微高地に推定されるため、この微高地のレベルで犬丸川岸まで平地が広がっていたと推察される。

旧海岸線は、縄文期の海水の浸食から、台地周辺まで海水が及んでいたものを推定され、その後海退し、広大に入り組んだ台地を形成、また、犬丸川による土砂堆積により台地周辺に河岸段丘が形成され、現在の地形に至ったものと考えられている。

2. 歴史的環境

犬丸川周辺に所在する遺跡は古く、旧石器時代・縄文時代の遺跡の多くは洪積台地上に分布している。才木遺跡や大坪遺跡では石器が確認され、黒水遺跡では、縄文早期後半期の陥し穴が検出されている。

遺跡数は、縄文時代後期から増大し、諸田遺跡、植野貝塚、ボウガキ遺跡などがありボウガキ遺跡の西斜面には入垣貝塚などが所在する。

弥生時代の遺跡は福島遺跡などがあり、古墳時代には、旧下毛郡三光村で上ノ原横穴墓群に代表される遺跡が、5世紀後半から7世紀前半にかけて一帯に広がる。

古墳時代後期には、森山横穴墓群、城山古墳群に代表される横穴墓や、古墳が数多く作られ、時代を同じくする前田遺跡などの集落遺跡との関係性が注目を集めた。

また、丘陵にある伊藤田・野依窯跡群での須恵器の生産が開始された時期でもある。

奈良時代の遺跡では、野依条里、定留遺跡などが確認されており、特に定留遺跡では蛸壺焼成遺構が検出され、海に関わる集団の存在が確認され、生活の場が平野部に求められてきた時期であったと考えられている。

本調査地の南側犬丸川沿いに古代官道が宇佐に向け伸びていたことが12世紀後半から13世紀初頭の二重の堀で囲まれた方形居館が犬丸川流域遺跡群で検出されている。また、この流域には中世城館が多く、大畑城、山中城、上・下伊藤田城、野依城、犬丸城、中尾城などがあげられる。

<参考文献>

「犬丸川流域遺跡群」 1997 中津市教育委員会

「ボウガキ遺跡・福島遺跡棒垣地区 福島遺跡西入垣地区」 2005 中津市教育委員会

第3章 野田遺跡

第1節 報告にあたって

1. 発掘調査の概要

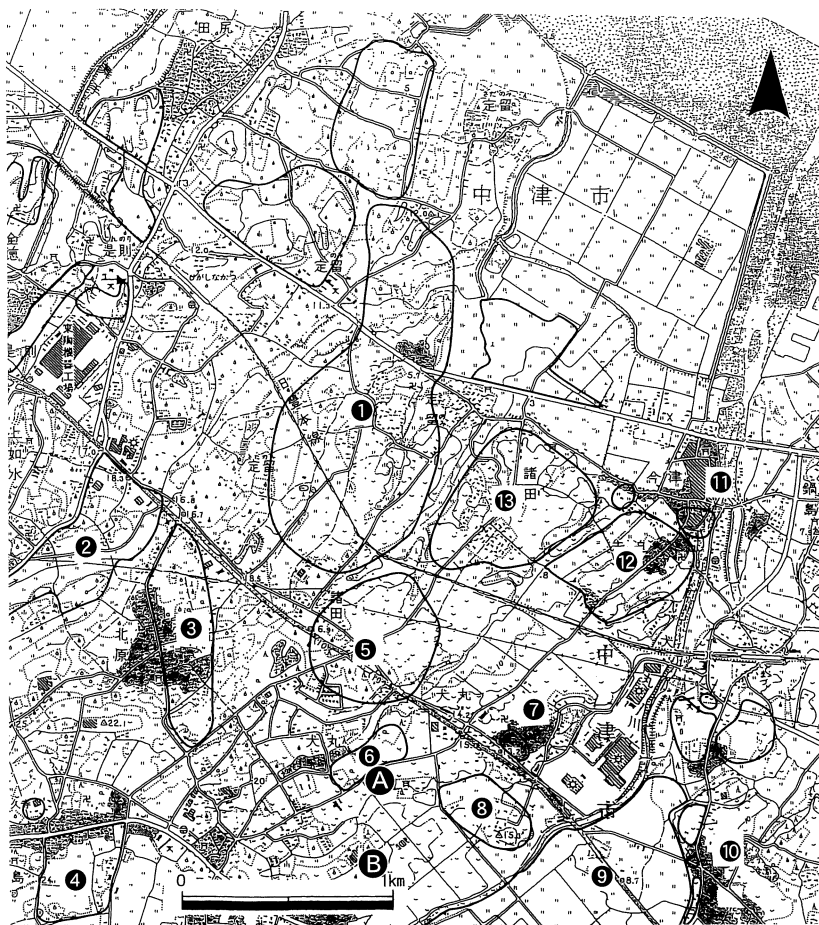
本調査は、平成15年度に行われた試掘調査で得られた所見・成果及び道路を挟んで同年度本調査が実施された上畑成遺跡の調査成果を参考とした。

対象地域の約2,000㎡を調査対象区として設定し、水路で分断された東部分をA地区、西部分をB地区に設定し、調査を実施した。対象地区は、昭和50年頃に犬丸地区全域を対象とした圃場整備事業が行われており、当時の施工図面等が無く掘削の可否箇所が確認できなかったため、盛土部分、削平部分が確認できなかった。調査時に水田であった箇所をみると、緩やかな傾斜を切り込んで水田を形成しているため、標高が高いほど遺構の残り方が良好であることが予想された。

旧地形が緩やかな傾斜地であったことを推察できる一方、南側の低い箇所は、河岸段丘と台地の間に形成された侵食谷であったことが想定される大きな落ちが現地形で確認されていたため、調査当初表土除去の際に、調査区南端部のみ先行してトレンチを設定し掘削を試みた。調査区南方向に大きく落ちる遺物を含まない黒灰色粘性土を確認し、標高約15mで湧水することから、この箇所を当初想定された侵食谷であること、またこれを埋め立てた部分と判断し、調査対象から除外した。

- A 野田遺跡
- B 北小枇杷遺跡

- ① 定留遺跡
- ② 大悟法地区条里跡
- ③ 北原遺跡
- ④ 三保遺跡
- ⑤ 諸田南遺跡
- ⑥ 上畑成遺跡
- ⑦ 犬丸城跡
- ⑧ 中尾城跡
- ⑨ 野依地区条里跡
- ⑩ 植野貝塚
- ⑪ 末広城跡
- ⑫ 十前垣遺跡
- ⑬ 諸田遺跡



第1図 北小枇杷遺跡・野田遺跡周辺遺跡図

第2節 発掘調査の記録

1. 調査経過と調査の方法

野田遺跡は、宇佐から西へ広がる長峰台地西側にあたり、標高約16mに位置する。昭和期に犬丸地区全域を対象とした圃場整備事業による大規模開発があったことが周辺の水田から推察できた。これによる大規模な地下への掘削が考えられたが平成15年度の試掘調査の際、遺物・遺構とも良好な状況で確認されたため、水田の臨時水路撤去後に調査を実施することになった。

本調査は、平成16年(2004年)5月17日から、同年10月15日までの間実施した。

調査区は、東側二等辺三角形に西側水路で画された調査区A地区と、東側台形状に画された調査区B地区とした。

当初、侵食谷が想定された調査区南端部に廃土置き場を設定するため、先行してトレンチを設定し、地下の状況を確認した。台地の落ちが確認された部分からは、遺物がまったく含まれない粘性の高い黒灰色粘性土が堆積し、標高約15mで湧水することを確認した。谷自体は、調査区南側から20mほど離れた微高地で立ち上がりを確認できると考えられ、黒灰色粘性土は、旧地形の谷を客土で埋めたため腐食したものと思われる。黒灰色粘性土の上にマンガンの沈着した盤があり、耕作土がそれを被る堆積を見ることができる。

調査区は、廃土置き場確保後、北側A区から順次表土剥ぎを実施した。

天候不順や、現場調整等の遅れからやや調査区全体の検出には時間を要したが、7月1日から調査区周辺の整備を行い、調査を開始した。調査区周辺では、田植えが一段落し、農家の方々や、地元住民の方の興味関心が高く温かい言葉を頂く中で調査を実施することができた。

A区から平面精査を行いながら遺構の検出を行ったところ、包含層上面で、圃場整備以前の水田の畦畔を確認した。この畦畔から下層には、黒色土の10～15cm程度の堆積を見ることができることから、調査区北側は、遺跡の残り方が良好であることが想定された。道路を挟み上畑成遺跡では、野田遺跡の検出面より若干低い検出であったため、野田遺跡は旧地形の谷から、旧海岸線までの間の高台にあたると思われる。

A区の包含層掘下げを行っている間、A区西側で、プランの確認が困難な状況で蛸壺と考えられる土師質土器の集積が確認された。これらは、広域に分布しているものであったが、一定量集中して、範囲を限って確認された箇所は、その部分のみであったため、SX01とした。その他、不定形土坑が、大規模なもので7基、掘立柱建物が1棟確認された。

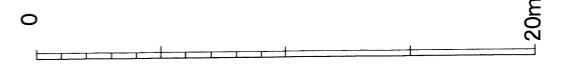
B区については、包含層を掘り下げると、大規模な不定形土坑が10基、竪穴住居が4基、掘立柱建物が6棟、確認された。このほかについては、規模を問わず不明土坑が数基確認できた。このほか、溝状遺構を9条確認しているが、これらの溝は、B区の平行する2条は瓦質土器から中世段階のものであることから、野田遺跡で確認された溝で、南北方向に走るものは、中世以降に水田等で使われていたものと考えられる。また、SD01は、圃場整備直前の畦畔と考えられるものであるため、近世以降、SD09、SD10、SD07は、遺物の状況から、何らかの区画を体するもので、7世紀末段階のものと考えられる。いずれも大きく掘削を受けており、詳細延長、掘り方等は不明である。

発掘調査を終了については、中津土木事務所との協議で、工事の都合上早期終了を求められたため、急遽支援業務を9月から委託し、10月15日に調査を終了した。

現場の普及企画として、8月9日に、地元の中津発掘探検隊(小中学生15名)が、発掘調査を体験した。夏休みを利用して行った企画は、地元の小中学校の保護者が中心となって、大分県教育庁埋蔵文化財センターに依頼し、実施に至ったもので、地元の文化財に対する興味関心の高さを感じることができる体験学習となった。また、中津土木事務所の中津日田道路に関する説明会も同時開催され、児童生徒たちが、中津日田道路がいつ頃完成するのか等の説明や、なぜ発掘調査をするのかなどの質問が出され、調査担当者にとっても意義深い企画を受けることができた。このほか、地元要望により、今津公民館にて発掘調査報告会を行い、会期中約200名近くの方々に、訪問いただいた。



4



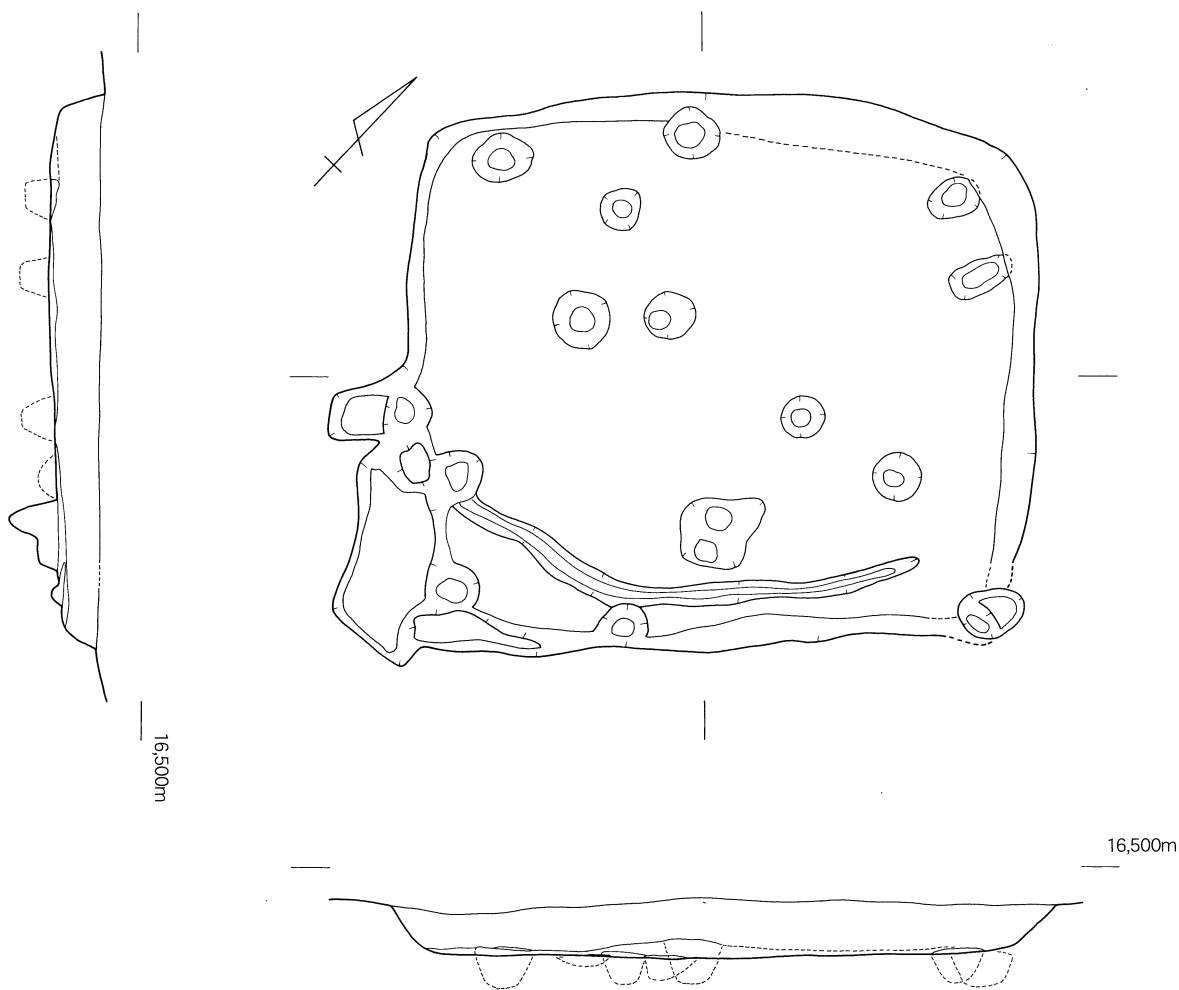
第3節 遺構と遺物

1. 竪穴住居跡

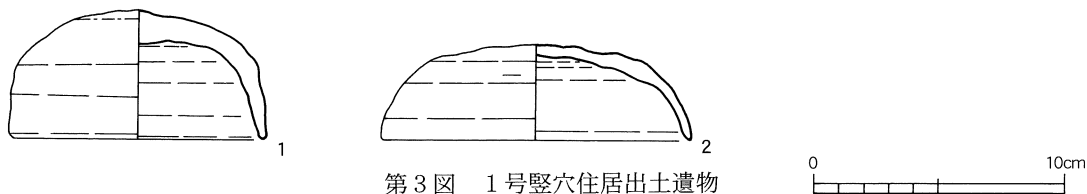
竪穴住居跡は、本遺跡において明確な遺構を形成しているものを報告する。

(1) 1号竪穴住居跡

1号竪穴住居跡は、B調査区北西部で検出された。隅丸方形で南北約3.0m、東西3.2m、深さ約0.3mである。住居内の西壁面直下に約0.1mの溝が掘り込まれる。主柱穴は4基で、床面からの深さは約0.2mである。柱穴の土層観察では柱穴は確認できなかった。北壁中央部の床面に竈跡が確認できたが、主体部は無く床面は被熱し、円形に赤褐色の焼土痕が残る。



第2図 1号竪穴住居跡図

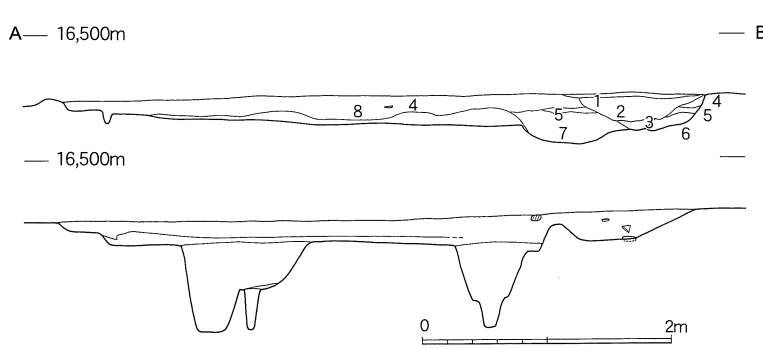
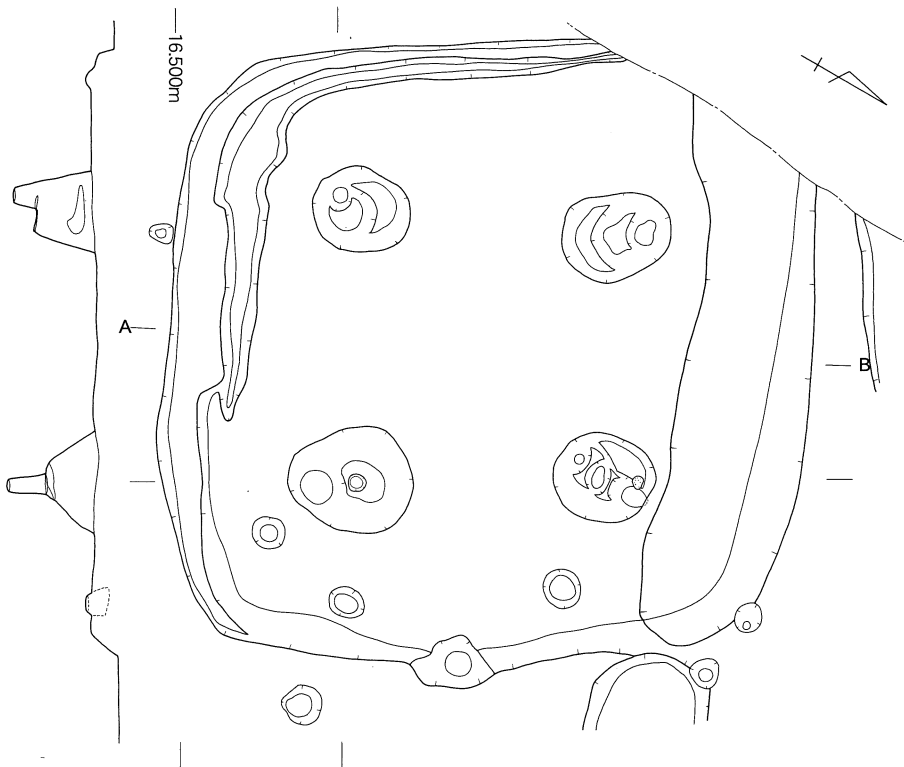


第3図 1号竪穴住居出土遺物

(2) 2号竪穴住居跡

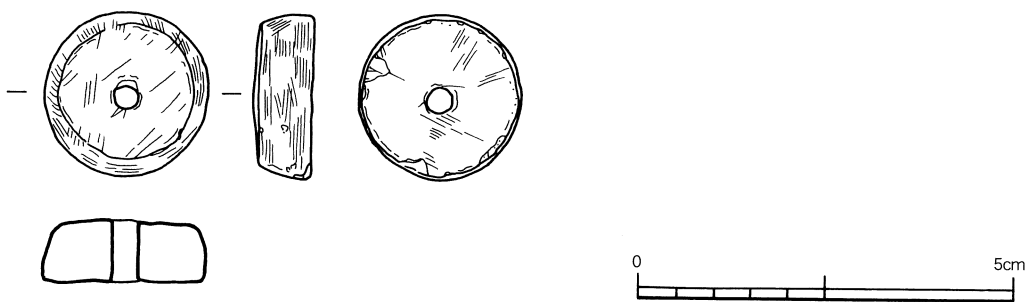
2号竪穴住居跡は、B調査区南西部で検出された。隅丸方形で南北約4.8m、東西約5.0m、深さ約0.2mである。住居内の西・南壁面直下に約0.2mの溝が掘り込まれる。主柱穴は4基で、径0.7m、床面からの深さは約0.7mである。柱穴の土層観察では柱穴は確認できなかった。北壁中央部の床面に竈跡が確認できたが、主体部

は無く床面は被熱し、円形に赤褐色の焼土痕が残る。住居跡北側を東から南に大きく屈曲する溝に切られ、竈のプラン等は確認できなかった。



- 1 暗褐色砂質土
- 2 暗褐色 " (遺物を含む)
- 3 " 粘土質
- 4 褐色砂質土
- 5 暗褐色砂質土 (黒色ブロック混)
- 6 "
- 7 褐色砂質土
- 8 暗褐色砂質土

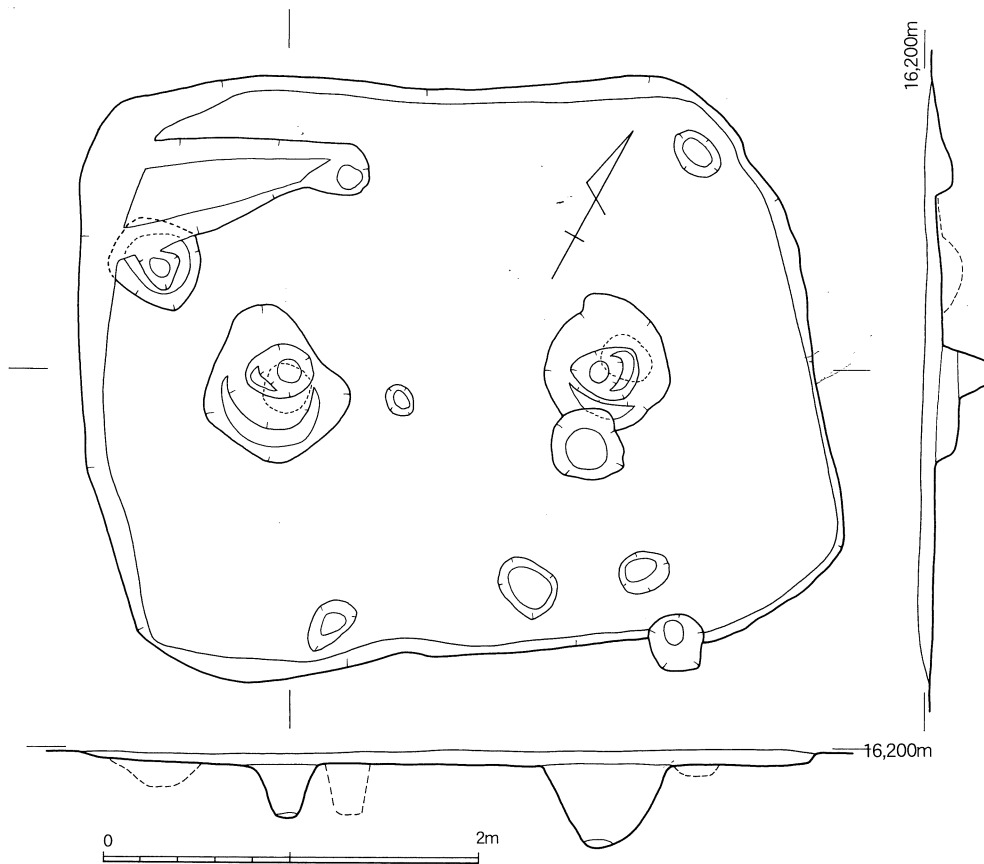
第4図 2号竪穴式住居跡図



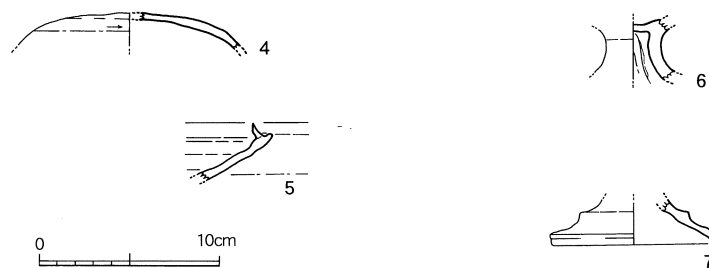
第5図 2号竪穴式住居出土遺物

(3) 3号竪穴住居跡

3号竪穴住居跡は、B調査区北部で検出された。隅丸方形で南北約3.0m、東西約4.0m、深さ約0.1mである。主柱穴は2基で、径約0.2m、床面からの深さは約0.4m、堀り込みは浅く上面の掘削が顕著である。柱穴の土層観察では柱穴は確認できなかった。



第6図 3号竪穴住居跡図

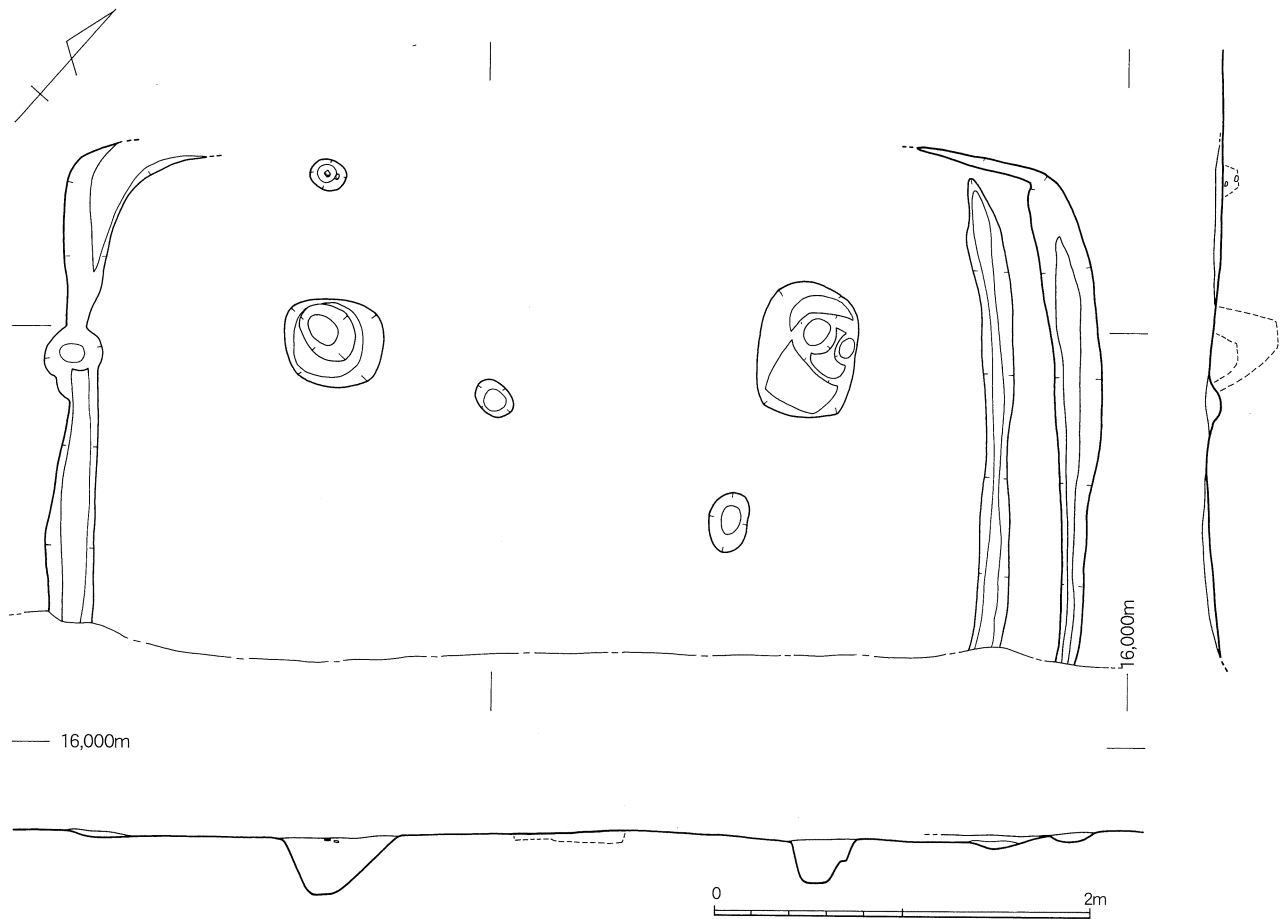


第7図 3号竪穴住居跡出土遺物

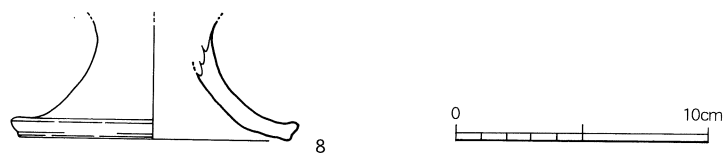
(4) 第4号住居跡

4号竪穴住居跡は、B調査区南部で検出された。隅丸方形で南北は、攪乱のため不明だが、東西5.4m、深さ約0.05mである。主柱穴は2基確認しているが、形状からおそらく4基と思われる。床面からの深さは約0.1mと浅く上面の掘削が顕著である。柱穴の土層観察では柱穴は確認できなかった。住居跡北側中央部に竈痕を確認した。しかし、主体部は無く床面は被熱し、円形に赤褐色の焼土痕が残る。当該調査区の南側の南に緩やかに落ちる旧地形を、圃場整備事業による大規模な掘削が、遺構確認に大きな障害となった。

特に4号竪穴住居跡は、当該遺跡の南端部分にあたることから遺構の依存が非常に希薄だった。4号竪穴住居跡から南は、旧地形の谷部にあたることから、集落を形成している一群から水辺に近い部分の立地であることが想定される。



第8図 4号竪穴住居跡図



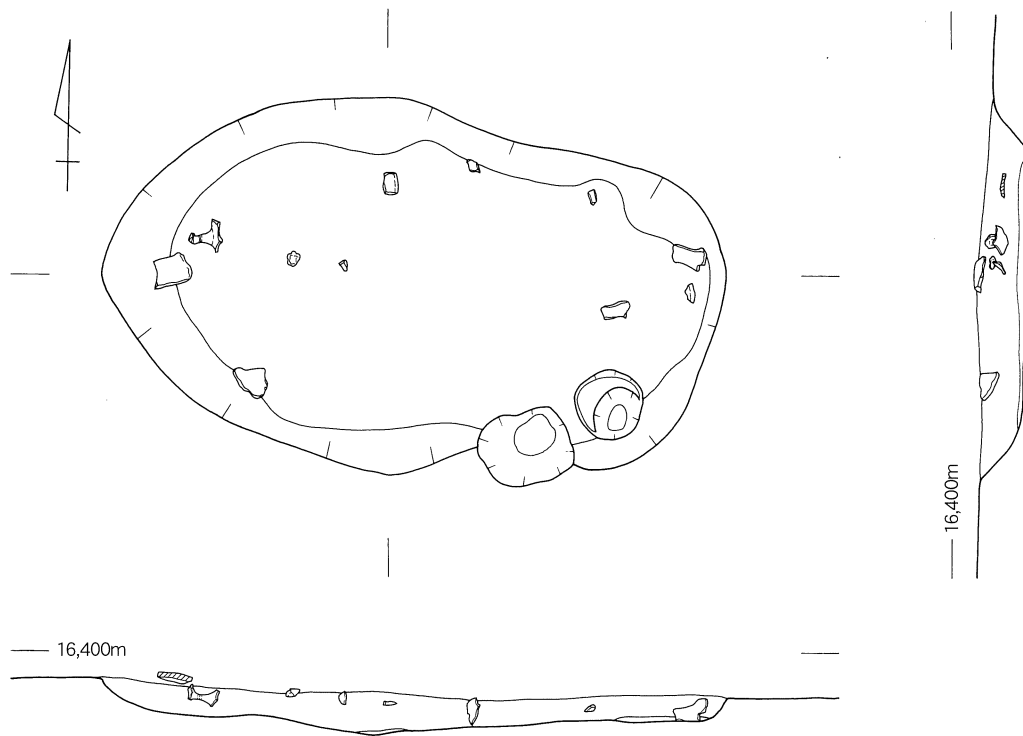
第9図 4号竪穴住居跡出土遺物

2. 土坑

土坑は、本遺跡において不定形もしくは、特に注目すべき掘り込みを形成しているものなどを中心に報告する。

(1) 1号土坑

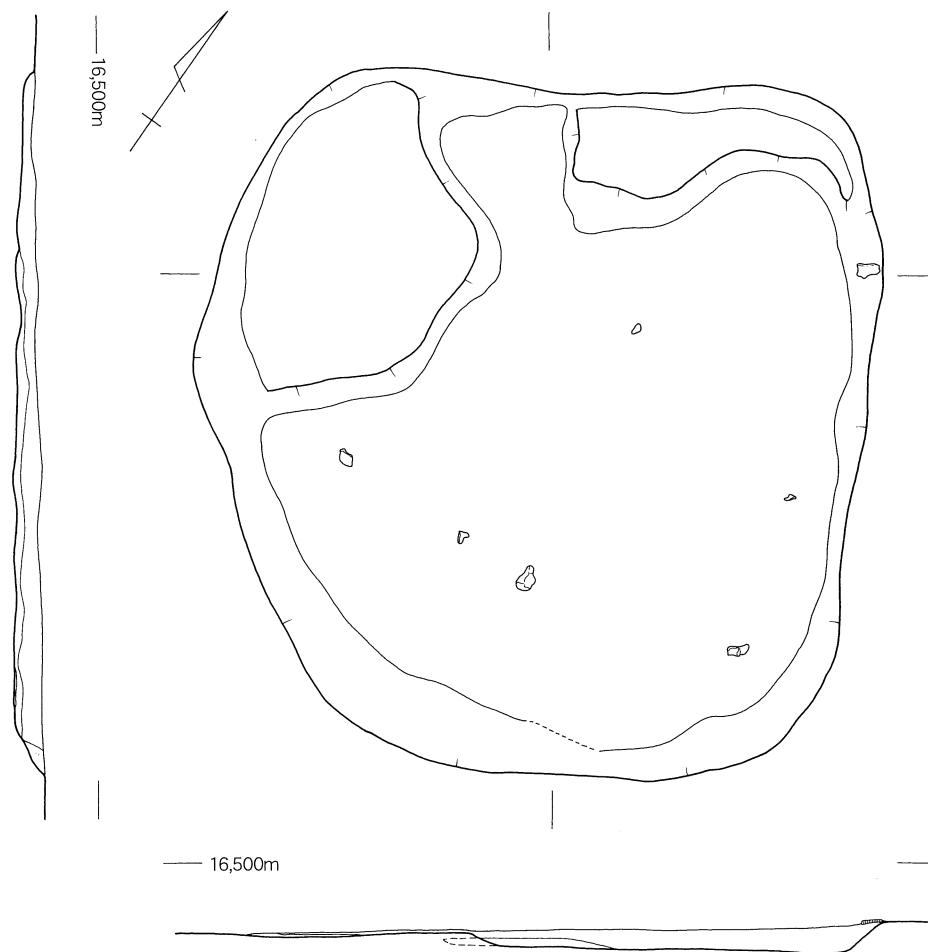
1号土坑は、B区北西部で検出された。楕円形で、最大径約3.4m、短径約2.0m、深さ約0.2mである。浅く皿上に掘り込まれ、遺構の性格は不明である。時期を同じくする1号竪穴住居跡東側に位置することから、なんらかの関係性があると考えられる。



第10図 1号土坑図

(2) 2号土坑

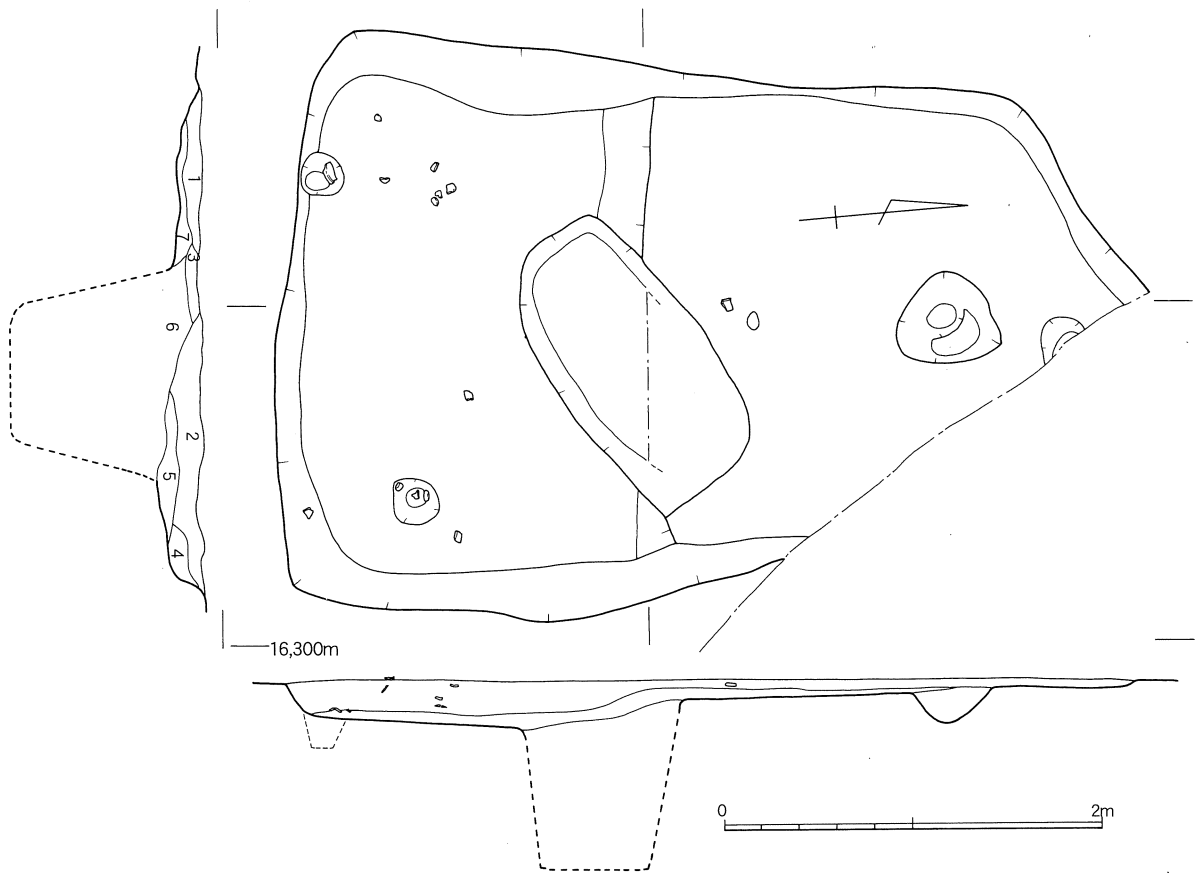
2号土坑は、B区北部で検出された。隅丸方形で、長軸約3.6m、短軸約3.4m、深さ約0.1mである。浅い皿上に掘り込まれ、明確な遺構構成ではないが、竈のような西側中央立ち上がり部に焼土痕がある。床面はよくしまっている。



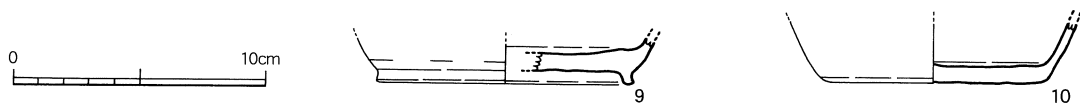
第11図 2号土坑図

(3) 3号土坑

3号土坑は、B区東部で検出された。隅丸方形で、長軸約5.0m、短軸約2.6m、深さ約0.2mである。皿上に掘り込まれ中央部に深い堀込みがある。性格不明遺構である。



第12図 3号土坑図

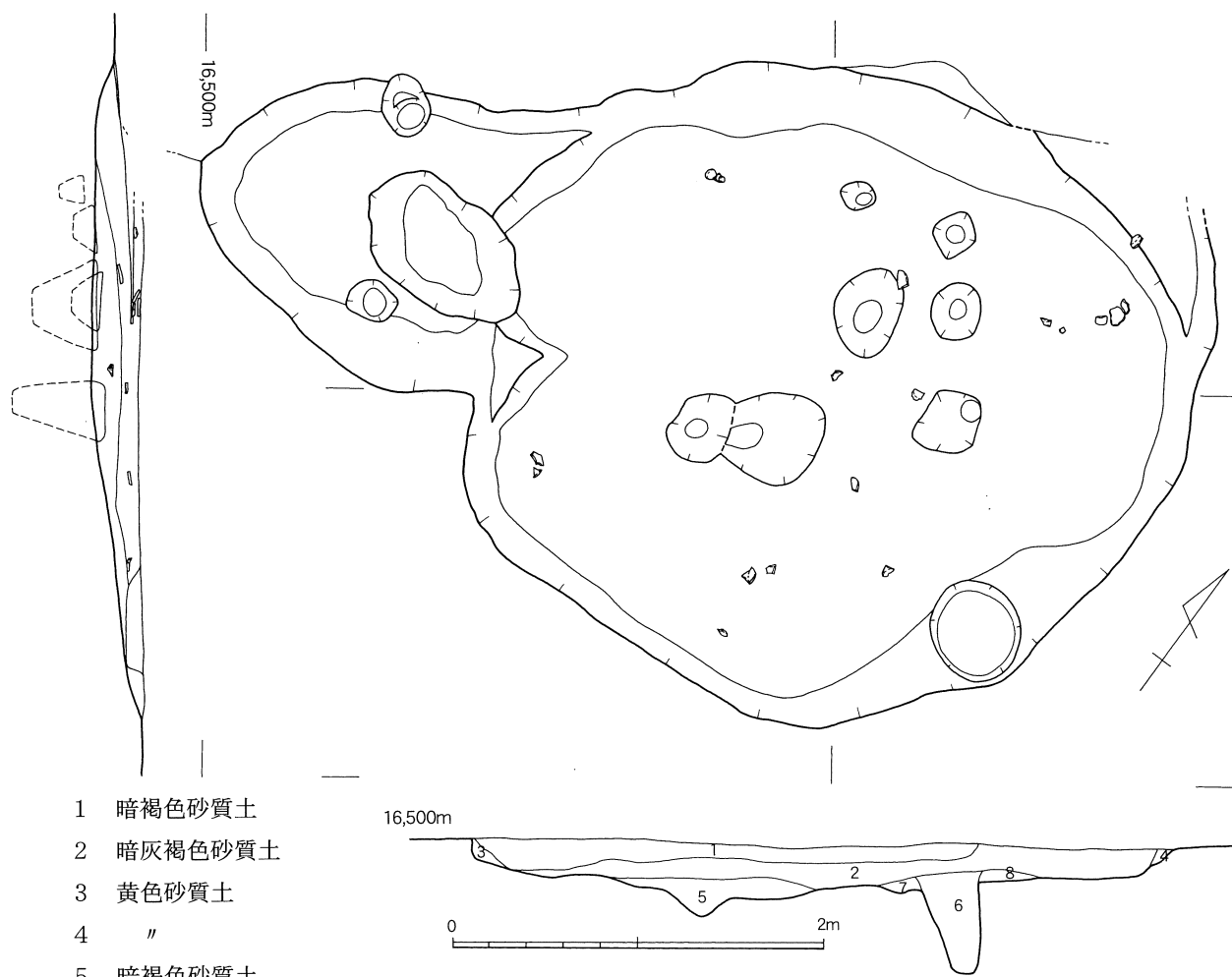


第13図 3号土坑出土遺物

(4) 4号土坑

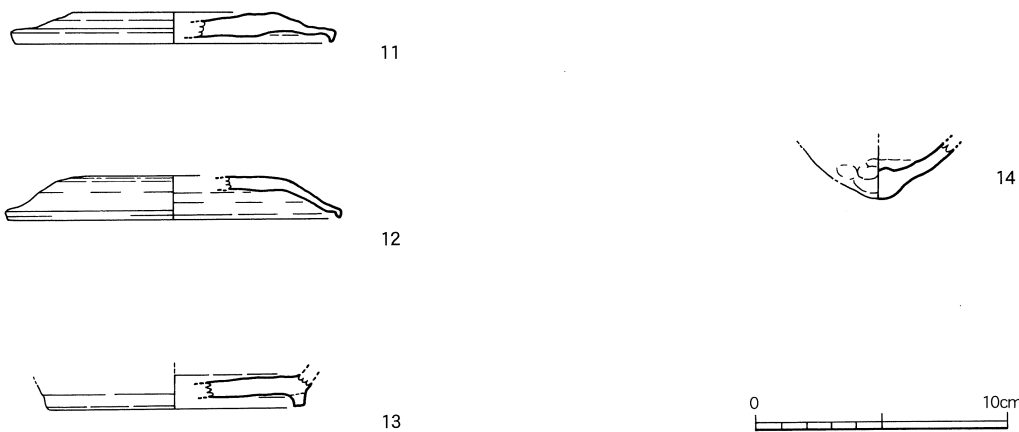
4号土坑は、B区北部3号土坑西で検出された。楕円形変形で、最大径約5.6m、短径約3.5m、深さ約0.2mである。皿上に掘り込まれる。出土遺物は、須恵器2で、復元口径13.0cm、器高12.0cm、復元底径8.0cmを測る。

2号掘立柱建物に近接するが、掘り込みは浅く、性格を考える上で重要な判断材料となる遺物も希薄である。



- 1 暗褐色砂質土
- 2 暗灰褐色砂質土
- 3 黄色砂質土
- 4 "
- 5 暗褐色砂質土
- 6 暗灰褐色砂質土
- 7 黒色粘質土
- 8 " (灰色ブロック混)

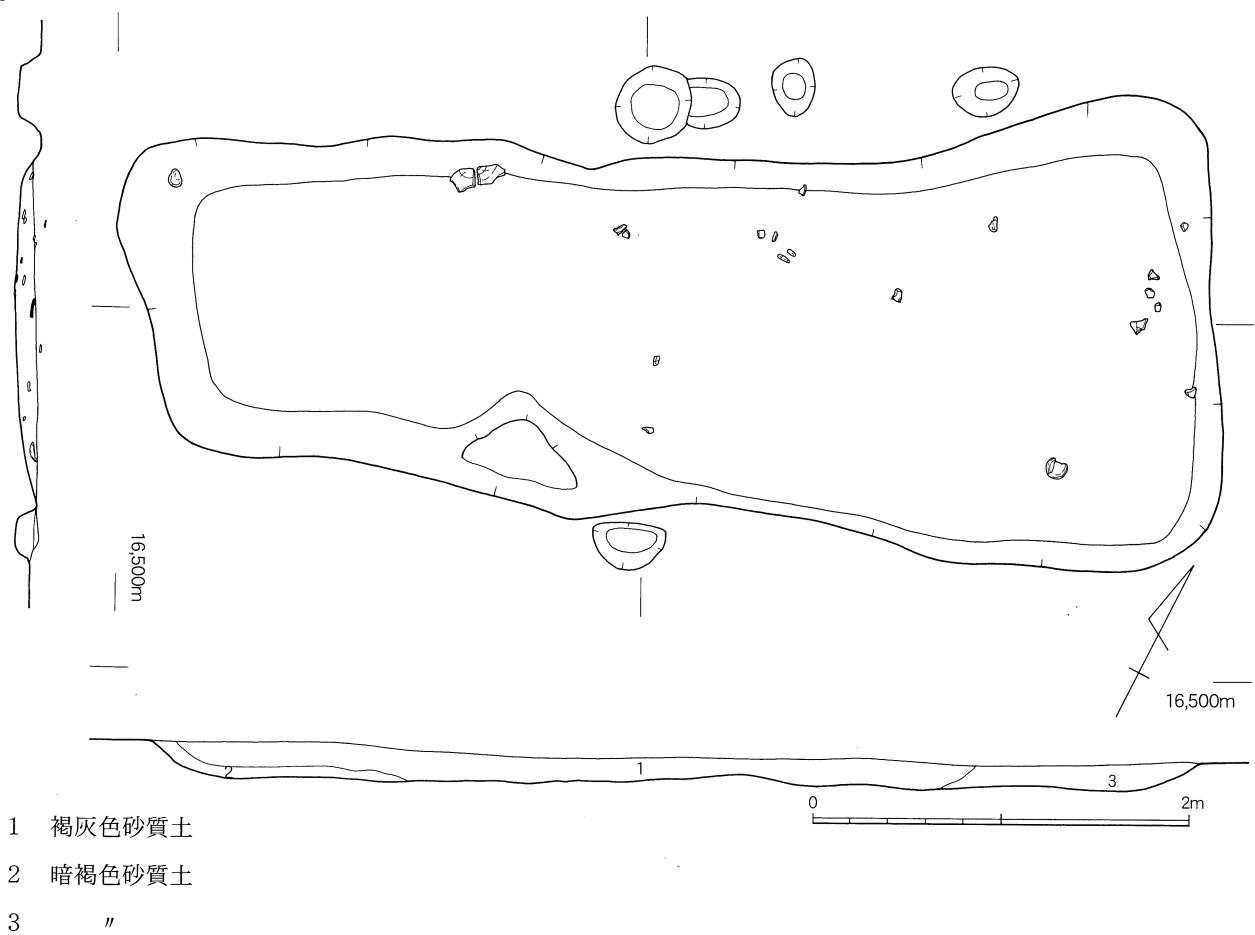
第14図 4号土坑図



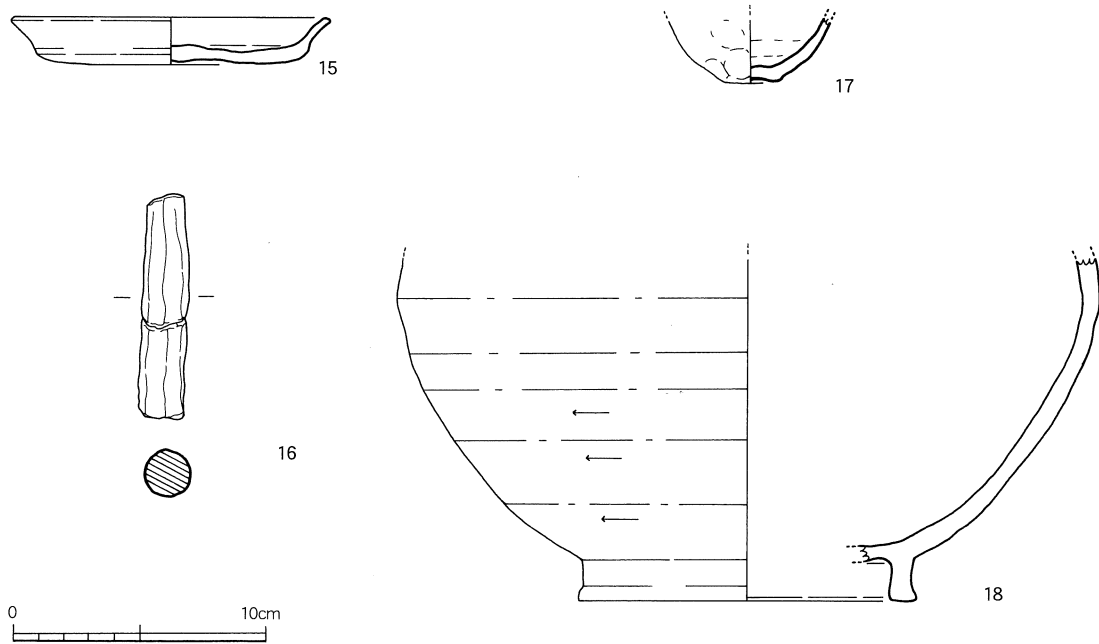
第15図 4号土坑出土遺物

(5) 5号土坑

5号土坑は、B東部で検出された。隅丸長方形を体する土坑で、長軸約5.6m、短軸約1.8m、深さ約0.1mである。浅い皿上に掘り込まれる。



第16図 5号土坑図

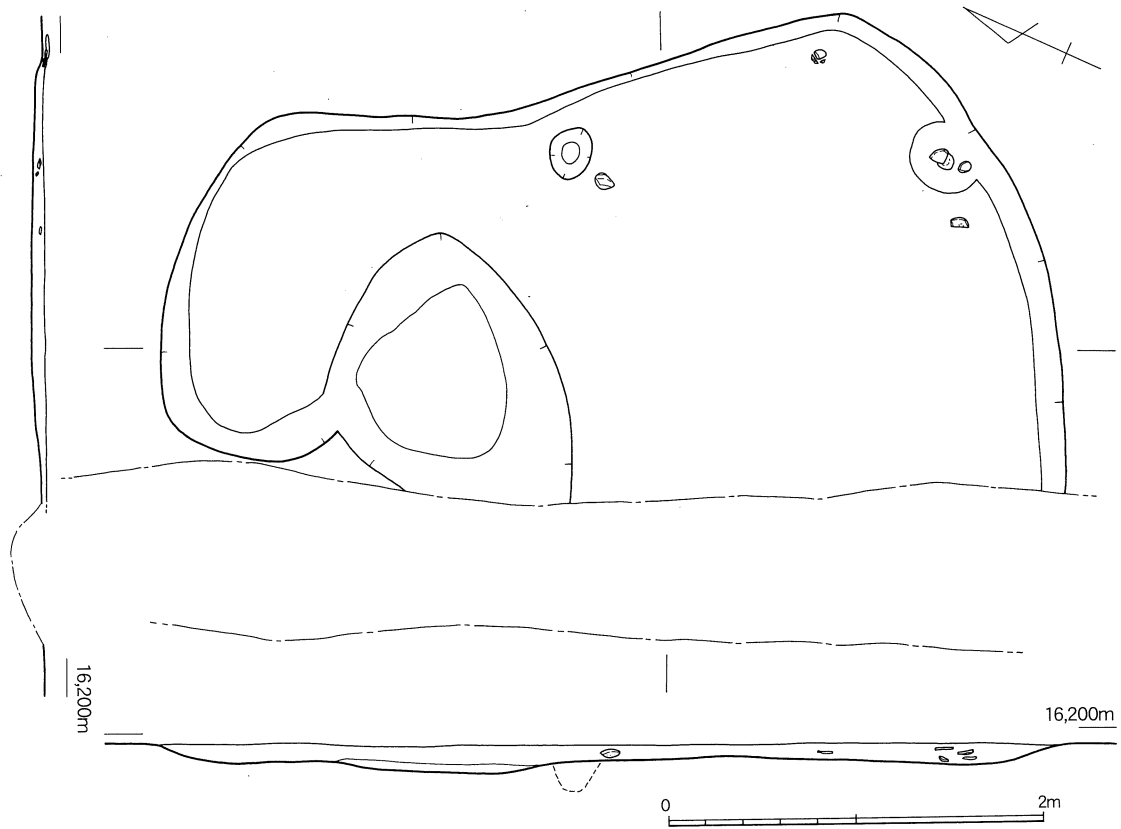


第17図 5号土坑出土遺物

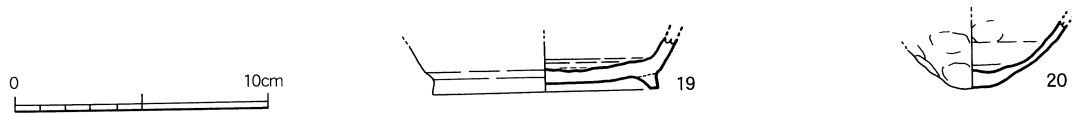
(6) 6号土坑

6号土坑は、B東部10号溝南側2号溝東で検出された。不定形土坑で、長軸約4.8m、短軸約2.2m、深さ約0.1mである。浅い皿上に掘り込まれる。

2段階に掘り込まれる土坑は、ひどく浅い検出状況だった。遺構検出までの包含層及び表土の厚さが、最も厚いことから、昭和期の圃場整備事業では、盛土であった可能性が高い。



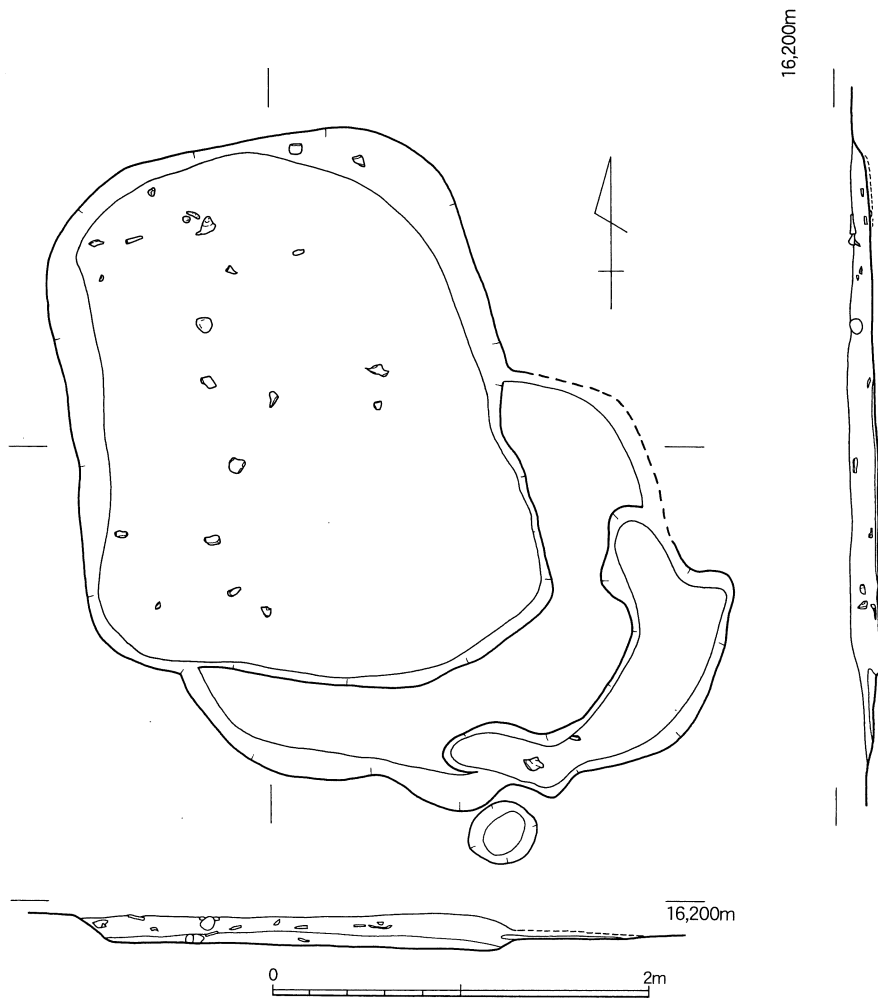
第18図 6号土坑図



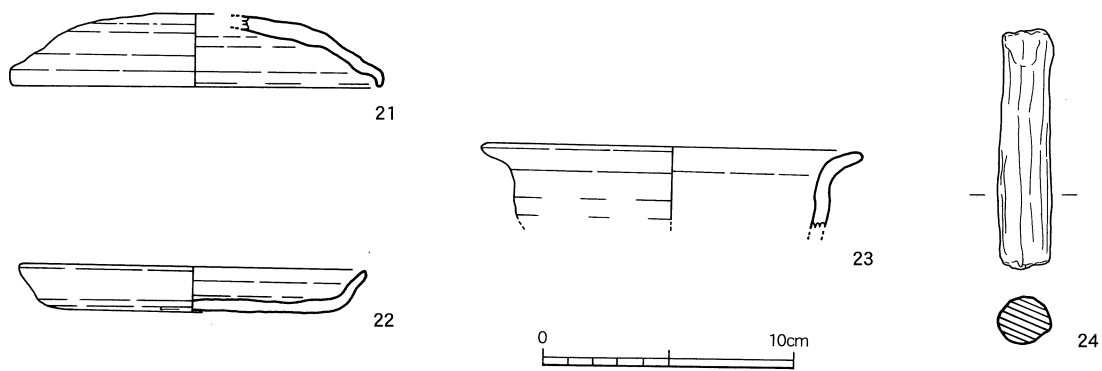
第19図 6号土坑出土遺物

(7) 7号土坑

7号土坑は、B区中央部6号土坑東で検出された。不定形で、長軸約3.4m、短軸約2.4m、深さ約0.2mである。浅い皿上に掘り込まれ、出土遺物17は、復元口径14.4cm、器高3.0cmを測る。また、出土遺物18は、復元口径は13.8cm、器高1.8cm、復元底径11.0cmを測る。性格は不明である。



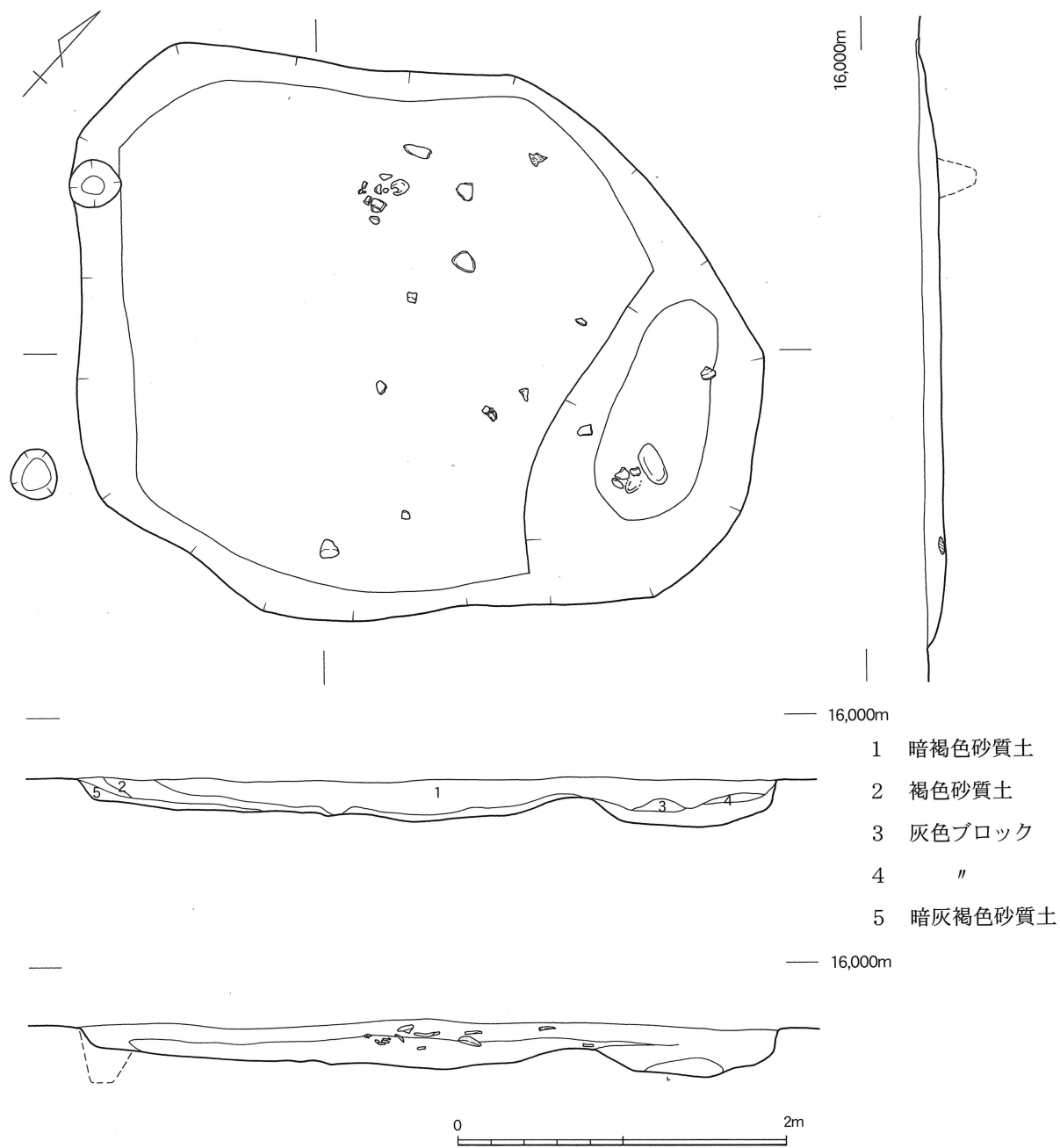
第20図 7号土坑図



第21図 7号土坑出土遺物

(8) 8号土坑

8号土坑は、B区南部で検出された。楕円形で、最大径約4.2m、短軸約3.2m、深さ約0.2mである。浅い皿上の2段階の掘り込みを確認した。性格は不明である。

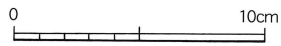
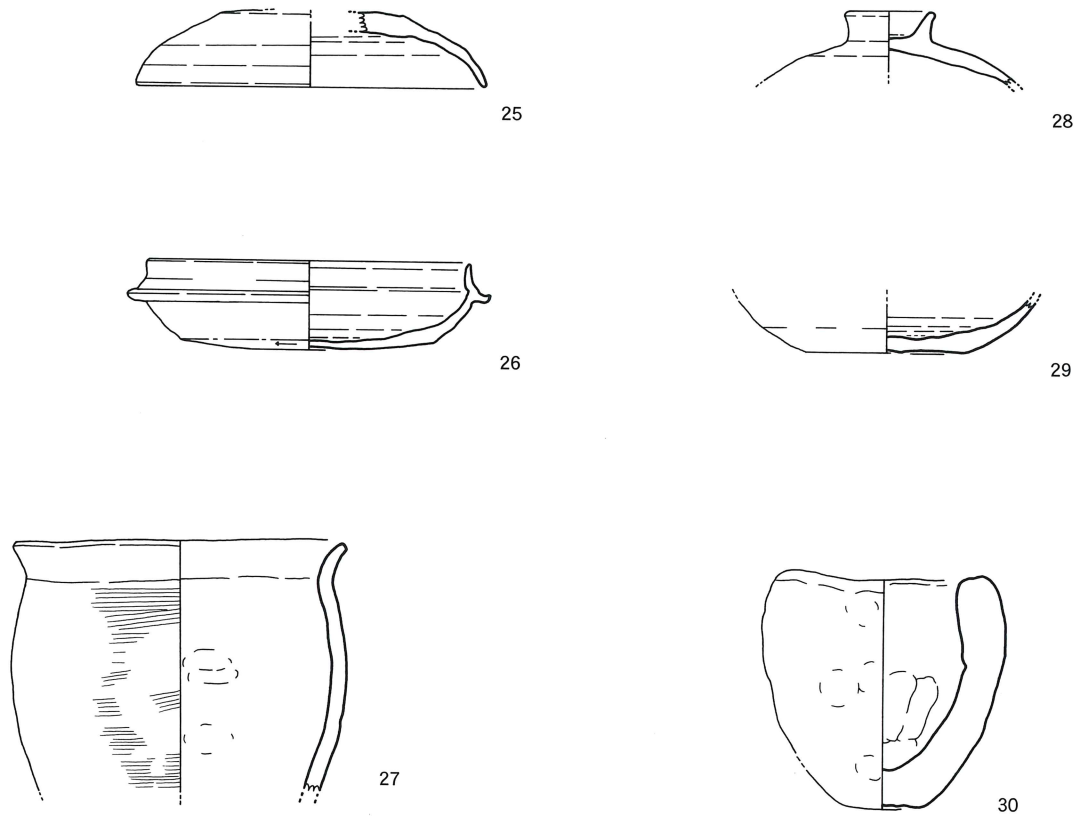


第22図 8号土坑図

8号土坑は、2段階の掘り込みが確認されており、当初隅丸方形プランの竪穴住居跡が想定されていた。

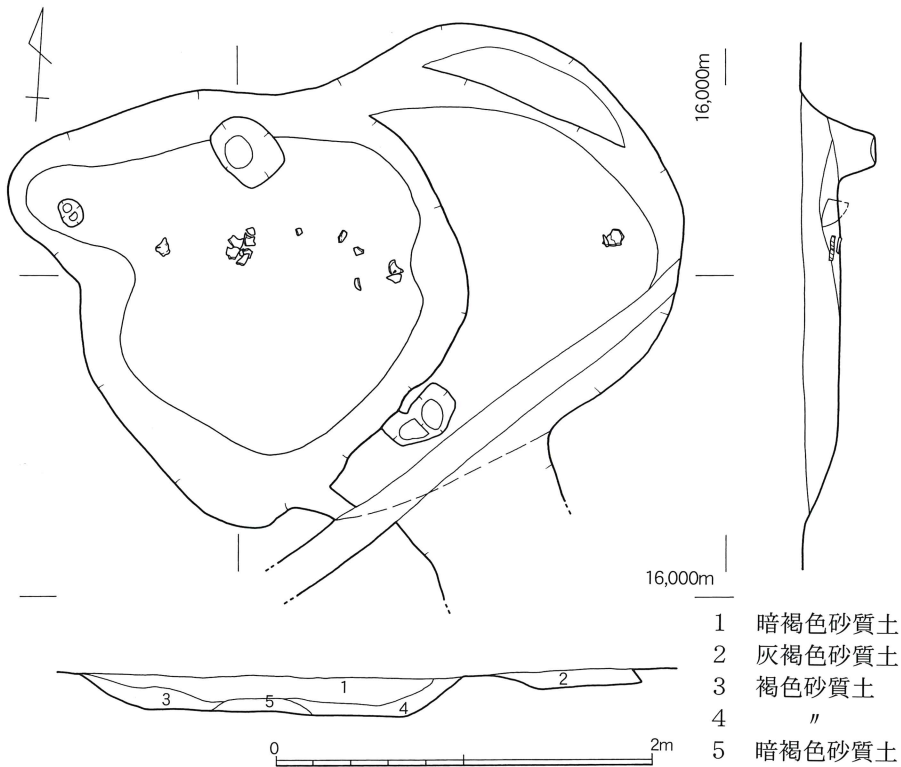
調査時、十字にベルトを設定し、土層観察を行うと浅く掘り込まれた様相を見る事ができた。出土した遺物を見ると、形式的に、周辺出確認されている土坑で出土する遺物と同じ時期に比定されたため、調査地が、8号土坑のような底部が皿上に掘り込まれた土坑を幾個所も作っていたことが分かる。

8号土坑は、掘立柱建物跡廃絶後に多く造られていることが他の遺構から確認できた。これは、土坑に若干の大小の規模があるものの、一定の時間軸の中で、ある一定の目的をもって大規模な土坑が形成されてきたことが推察できる。上層の圃場整備事業の掘削痕による削平が緩やかな傾斜面を切るように施されていることから、浅い一連の土坑群は、上部を大きくカットされていると考えられる。



第23図 8号土坑出土遺物

(9) 9号土坑

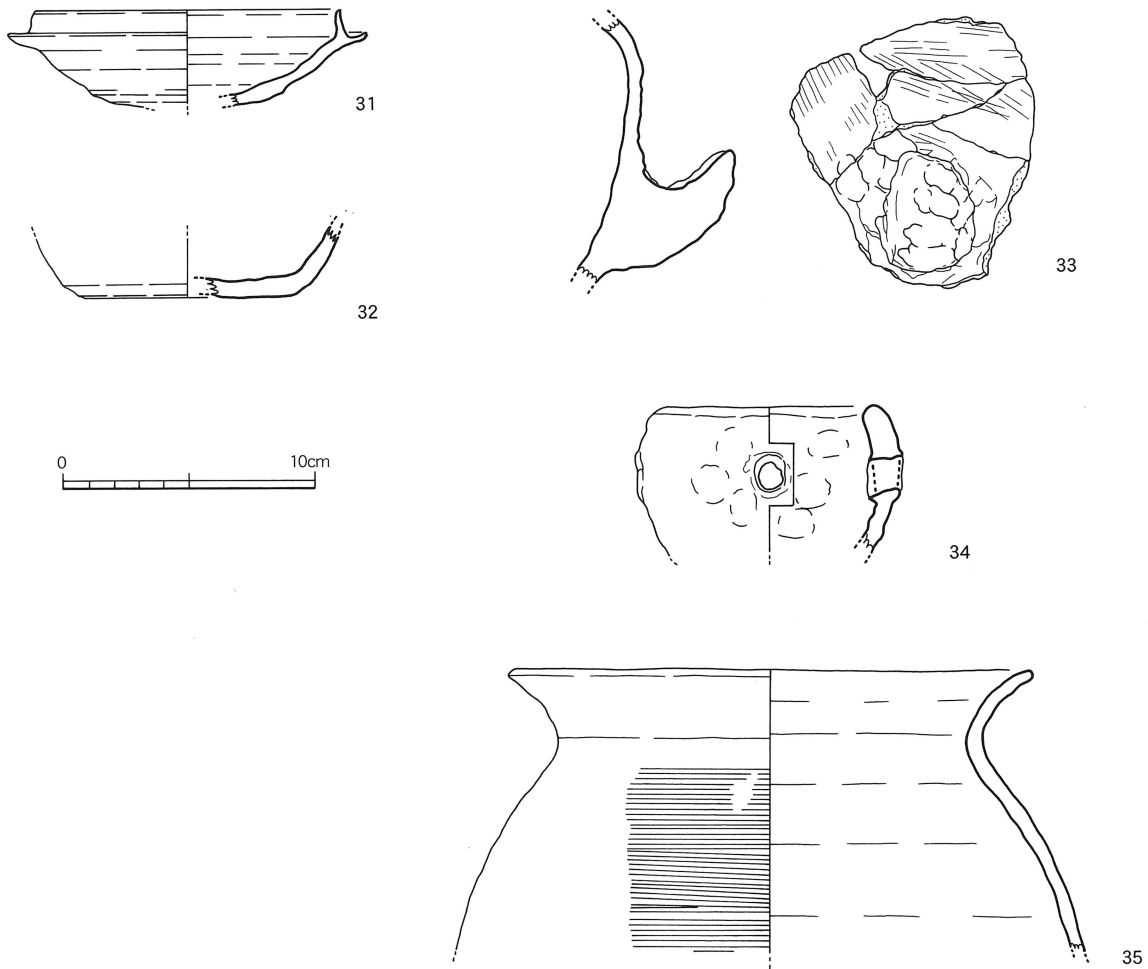


- 1 暗褐色砂質土
- 2 灰褐色砂質土
- 3 褐色砂質土
- 4 " "
- 5 暗褐色砂質土

第24図 9号土坑図

9号土坑は、B南部で検出された。不定形で、長軸3.4m、短軸2.2m、深さ約0.2mである。浅い皿上に掘り込まれ、性格は不明である。なお、3号土坑は、当該調査区では最も多く見られる不定形土坑の一つである。出土遺物1は、復元口径12.0cm、器高4.0cmを測る。また、出土遺物5は、復元口径は約20.0cmを測る。

不定形土坑は、共通して上部が削平を受けていることもあるが、床面が浅い平坦面を体している。9号土坑のようなものは、本調査で確認されている風倒木痕とは異なり、床からの立ち上がりや、明確な検出が可能なものが多い。



第25図 9号土坑出土遺物

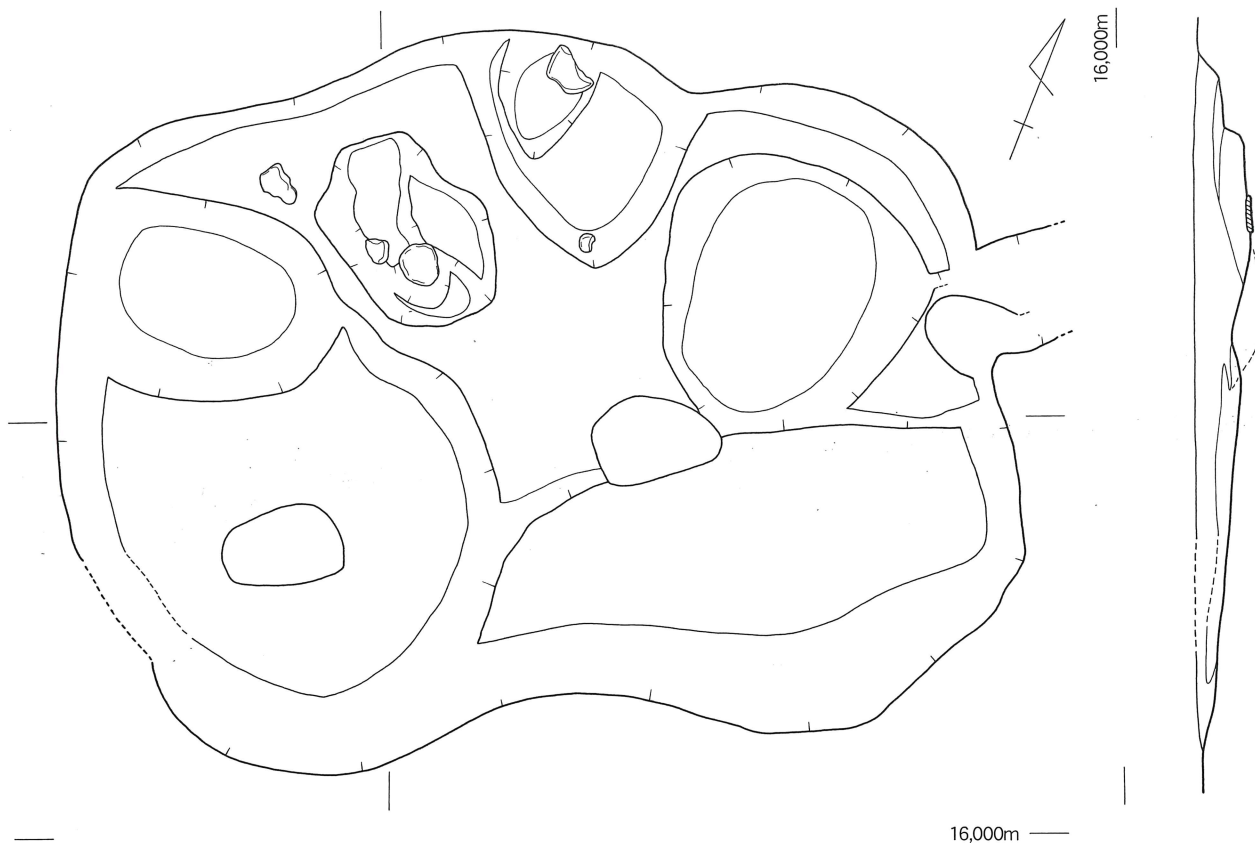
(10) 10号土坑

10号土坑は、B区南部で検出された。不定形で、長軸約5.2cm、短軸約3.4cm、深さ約0.3cmである。浅い皿上に掘り込まれ、性格は不明である。なお、9号土坑同様、当該調査区では最も多く見られる不定形土坑の一つである。

10号土坑の特徴は、遺構内に廃棄された頭大の河原石があげられる。また、何度も掘り込まれた様相が確認できる底部は、掘り込まれた単位で、直径約0.2m程度の皿状底部を形成する。

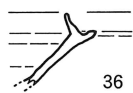
それぞれの土坑状になった底部は、最終的に1度に埋められるため、大きな土坑を体しているが、土取りの要素が強いと考えられる。

平面を観察すると、10号土坑を切って灰褐色砂質土で占められる柱穴が並ぶが、それらは近世段階の水田に伴うものであることが分かった。B区南部調査対象区外は、黄色砂質土（地山）のみで、遺構等は確認できなかった。調査区外の空闲地を除く、緩やかな傾斜を持つ当該地低地部分は、遺構が非常に希薄な部分であったことから、詳細な遺構配置等が確認できなかった。



- 1 灰色砂質土 (攪乱)
- 2 褐色砂質土
- 3 暗褐色砂質土 (ブロック混)
- 4 "
- 5 暗灰褐色砂質土
- 6 黄褐色砂質土

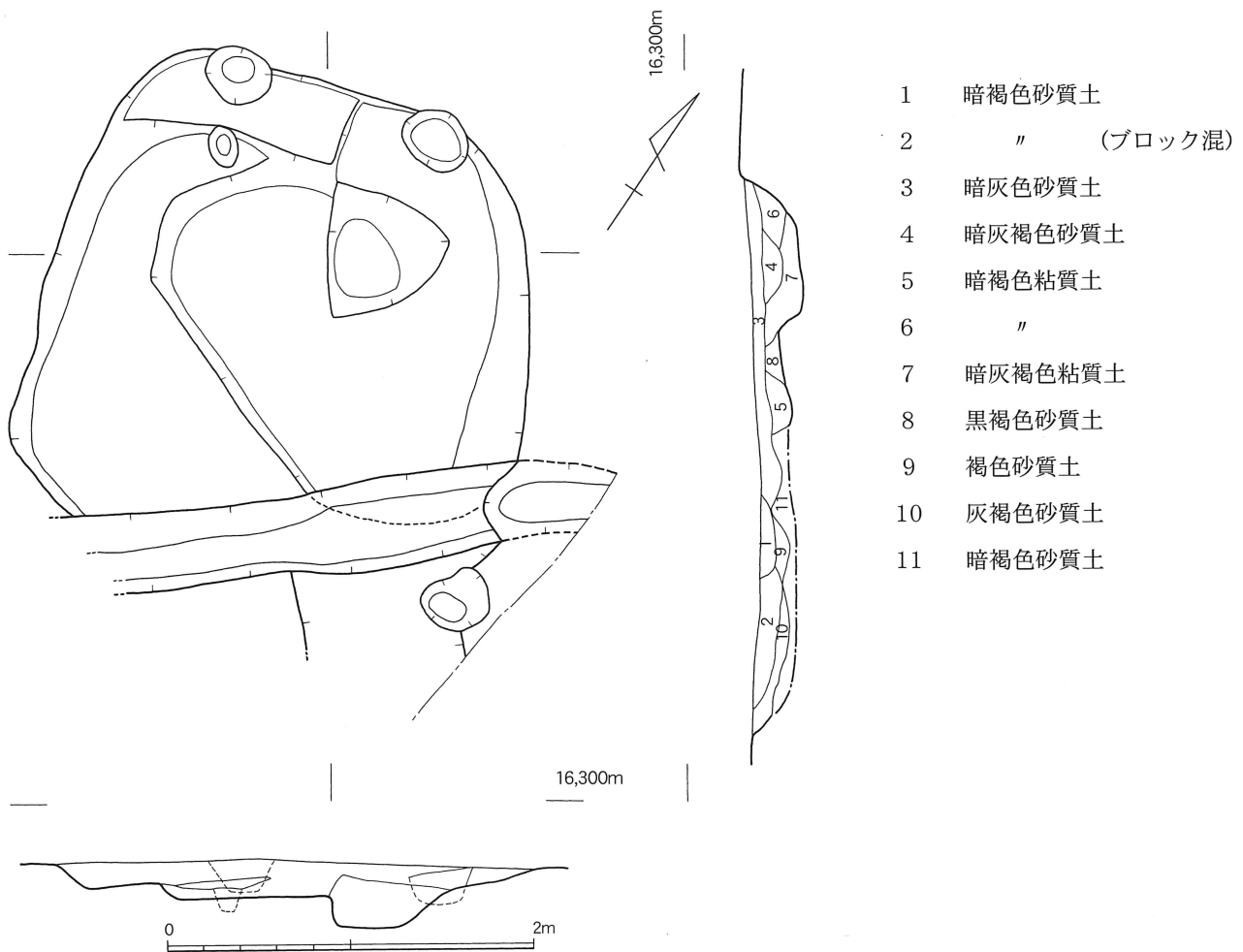
第26図 10号土坑図



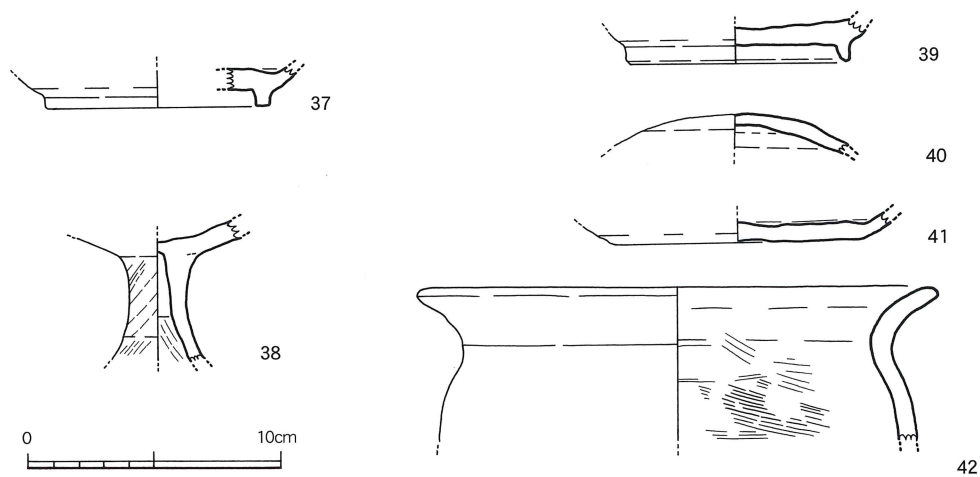
第27図 10号土坑出土遺物

(11) 11号土坑

11号土坑は、A区中央東部で検出された。不定形で、長軸約3.0m、短軸約2.7cm、深さ約0.2cmである。浅い皿上に掘り込まれ、性格は不明である。



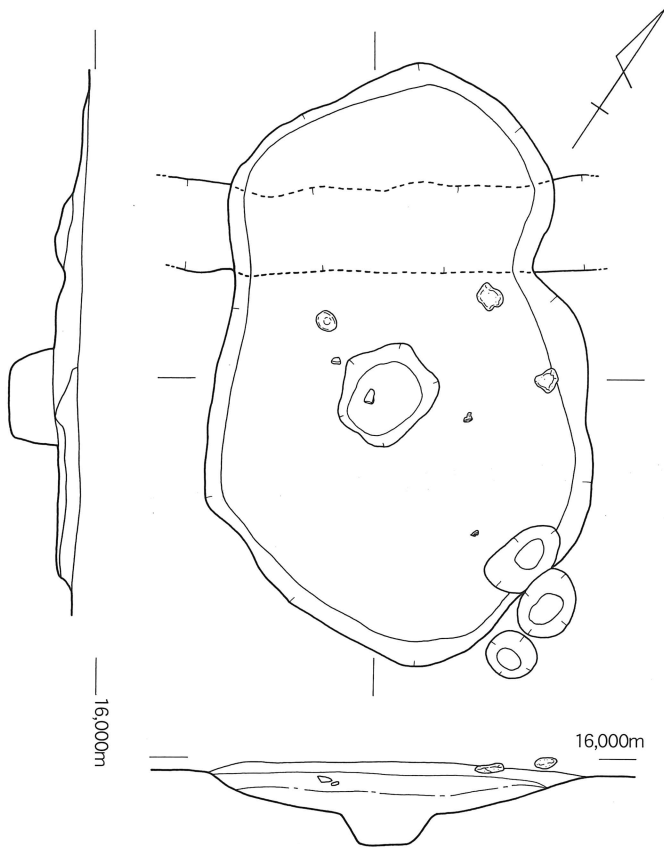
第28図 11号土坑図



第29図 11号土坑出土遺物

(12) 12号土坑

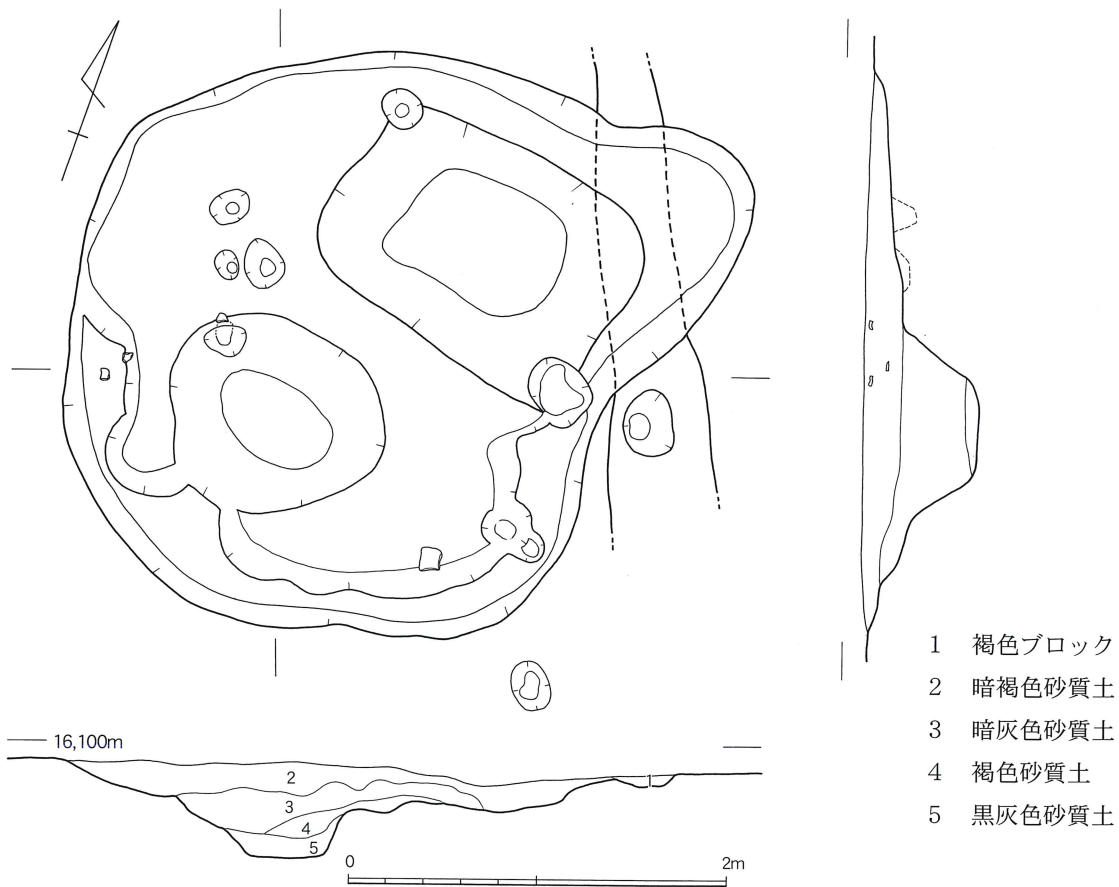
12号土坑は、A区中央東部11号土坑南部で検出された。隅丸方形を体する土坑で、長軸約3.2m、短軸約1.9m、深さ約0.4mである。比較的深い掘り込みが見られ、皿上に掘り込まれている。掘立柱建物に切られる土坑であることから、他の不定形土坑に比べ時期差があると思われる。出土遺物6は、復元口径は20.0cmを測る。性格は不明である。



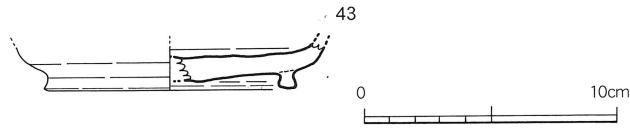
第30図 12号土坑図

(13) 13号土坑

13号土坑は、A区中央部で検出された。不定形土坑で、長軸約3.8m、短軸約3.0m、深さ約0.5mである。皿上に掘り込まれている。5号溝に切られる土坑である。5号溝は、連続した楕円形土坑が溝を形成していることから、用水路などの灌漑施設と考えられ、2号、3号溝と平行するライン上に位置することから、それらに切られることを考えると、近世以前の土坑と考えられる。性格は不明である。



第31図 31号土坑図



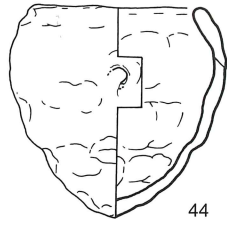
第32図 13号土坑出土遺物

(14) 14号土坑

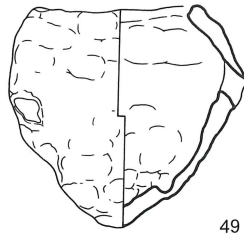
14号土坑は、A区中央北西部で検出された。不定形土坑で、長軸約6.0m、短軸約4.0m、深さ約0.2mである。皿上に掘り込まれている。大量の飯蛸壺片と須恵器片が廃棄された状況で検出された。



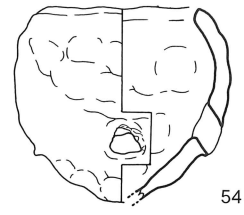
第33図 14号土坑図



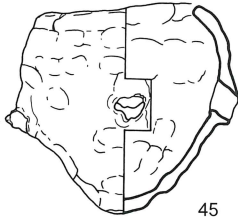
44



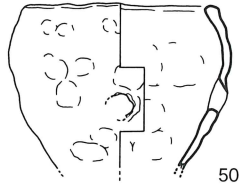
49



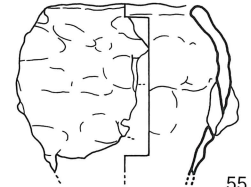
54



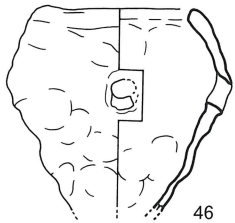
45



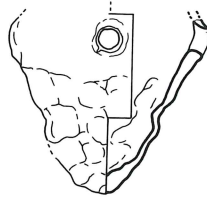
50



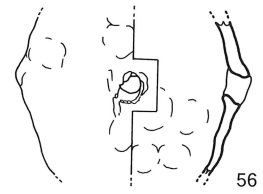
55



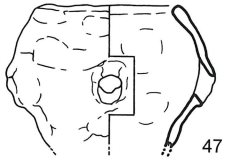
46



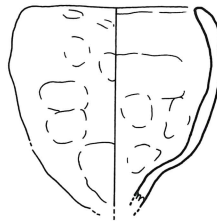
51



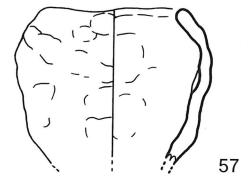
56



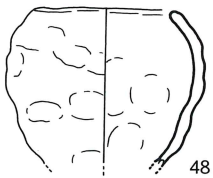
47



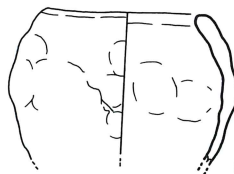
52



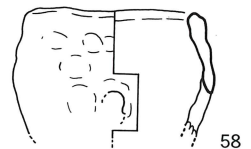
57



48



53



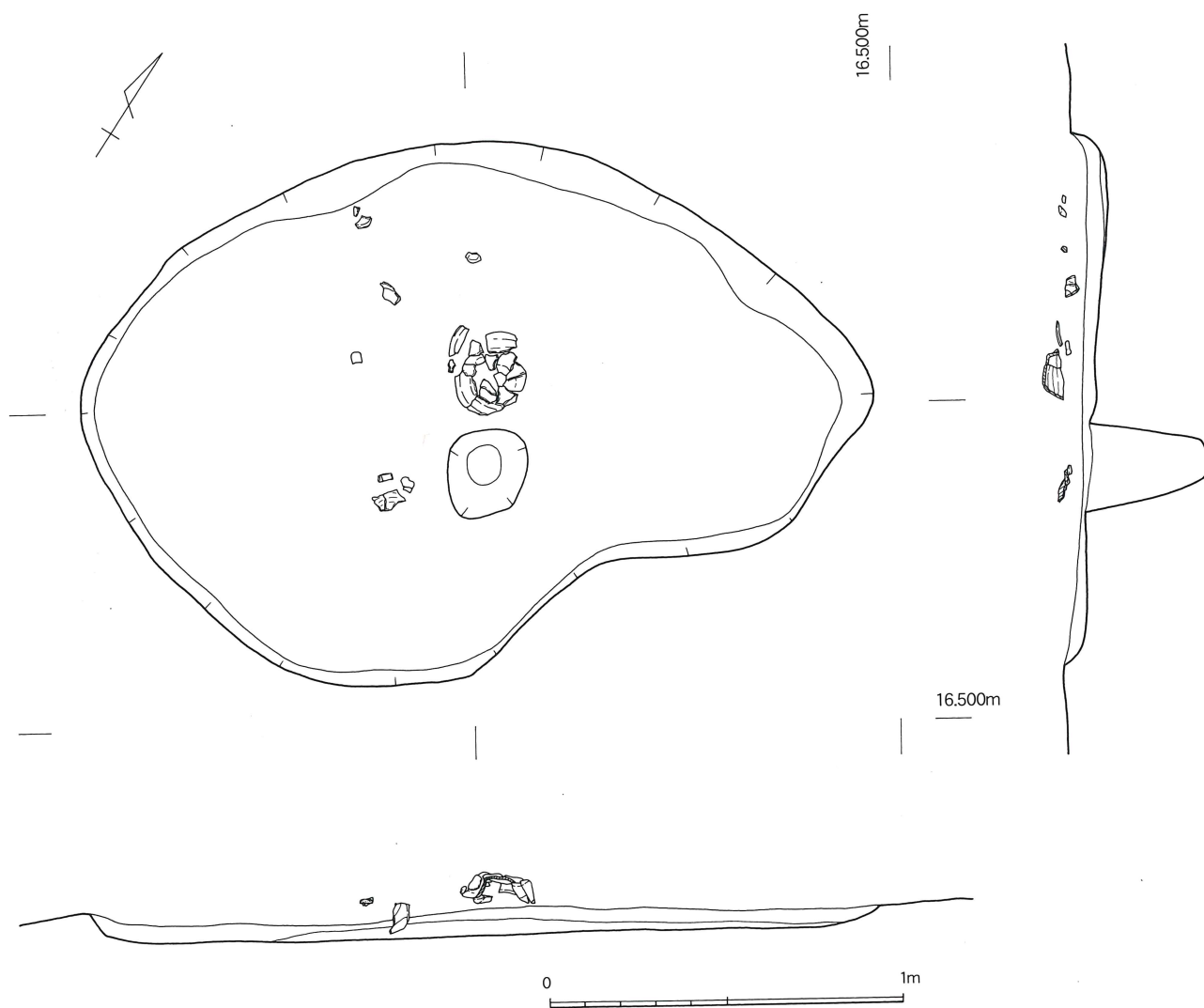
58



第34图 14号土坑出土遺物

(15) 15号土坑

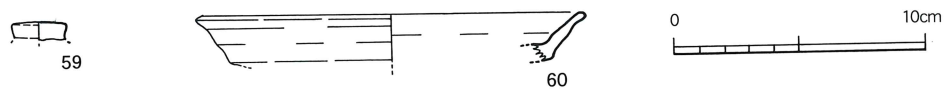
15号土坑は、A区中央北西部14号土坑南で検出された。不定形土坑で、長軸約4.4m、短軸約3.0m、深さ約0.2mである。皿上に掘り込まれている。性格は不明だが、14号土坑と関連性があると思われる。



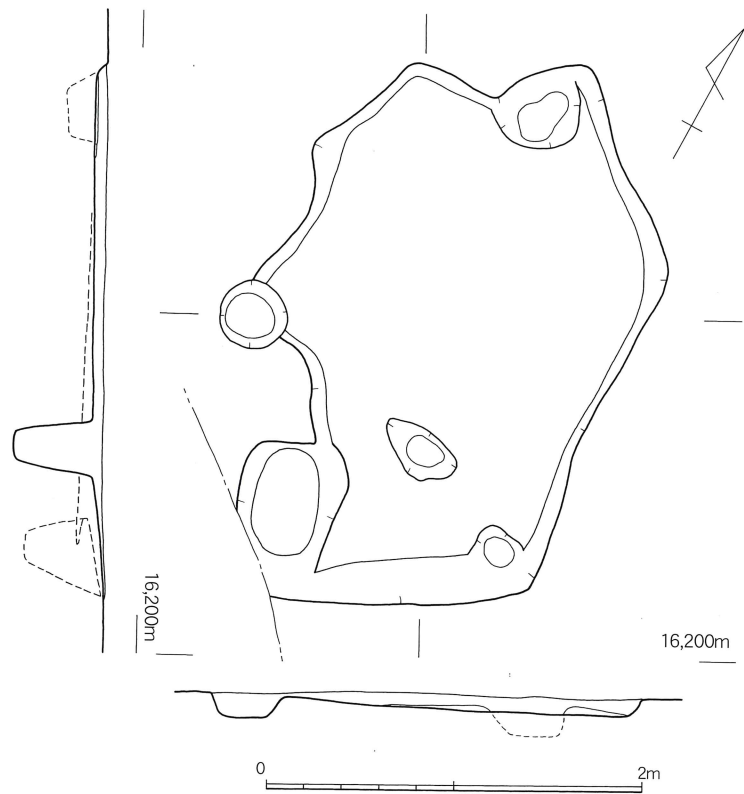
第35図 15号土坑図

(16) 16号土坑

16号土坑は、A区中央北西部14、15号土坑南で検出された。不定形土坑で、長軸約2.5cm、短軸約2.0cm、深さ約0.2mである。皿上に掘り込まれている。性格は不明だが、14号土坑と関連性があると思われる。



第36図 16号土坑出土遺物



第37図 16号土坑図

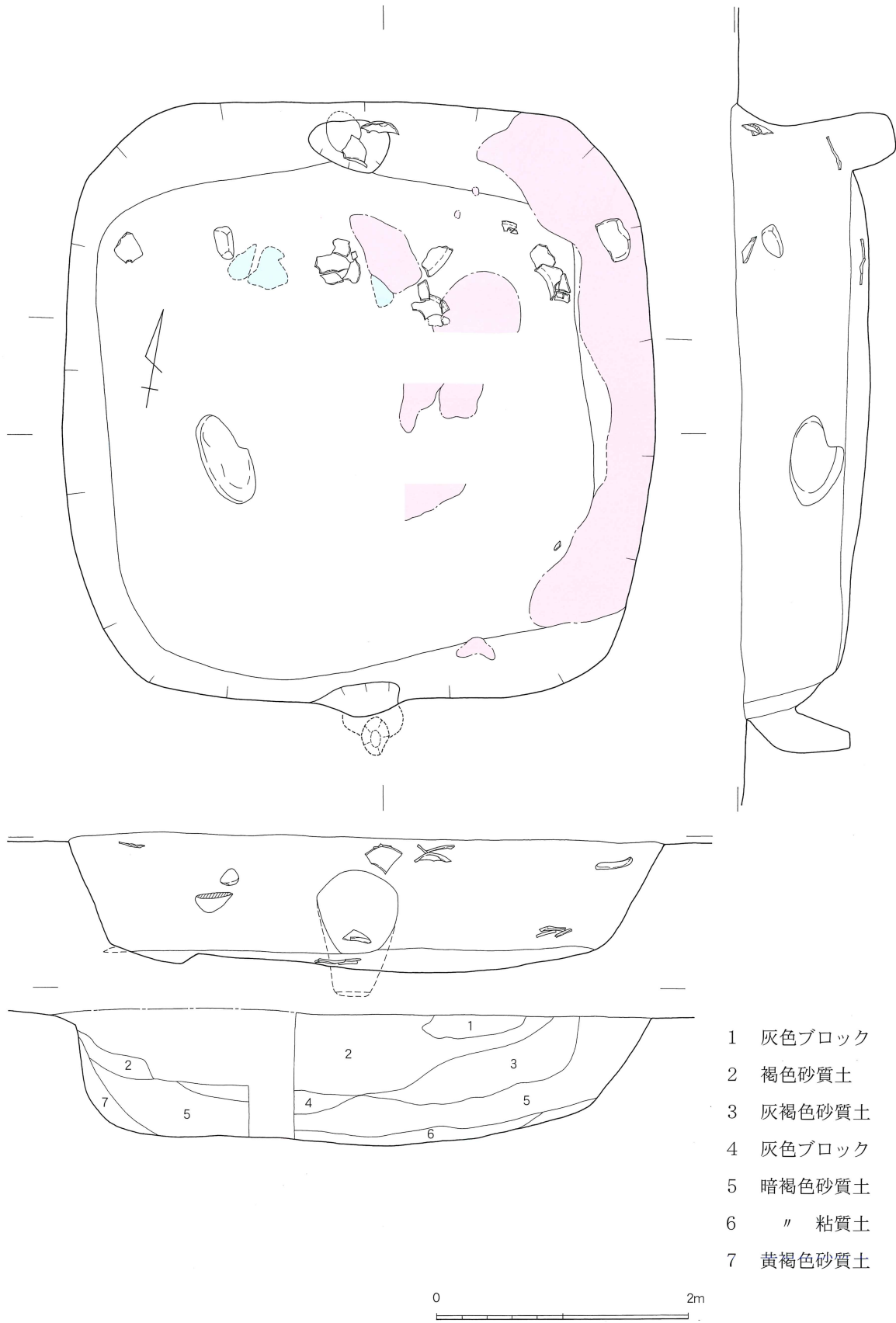
(17) 17号土坑

17号土坑は、A区中央北西部13号土坑南で検出された。隅丸方形を体する土坑で、長軸約4.6m、短軸約4.6m、深さ約1.0mである。焼土及び灰塊を主とする埋土で、性格は不明だが、A区内の様相から、7号掘立柱建物や14号土坑と何らかの関係性が考えられる。

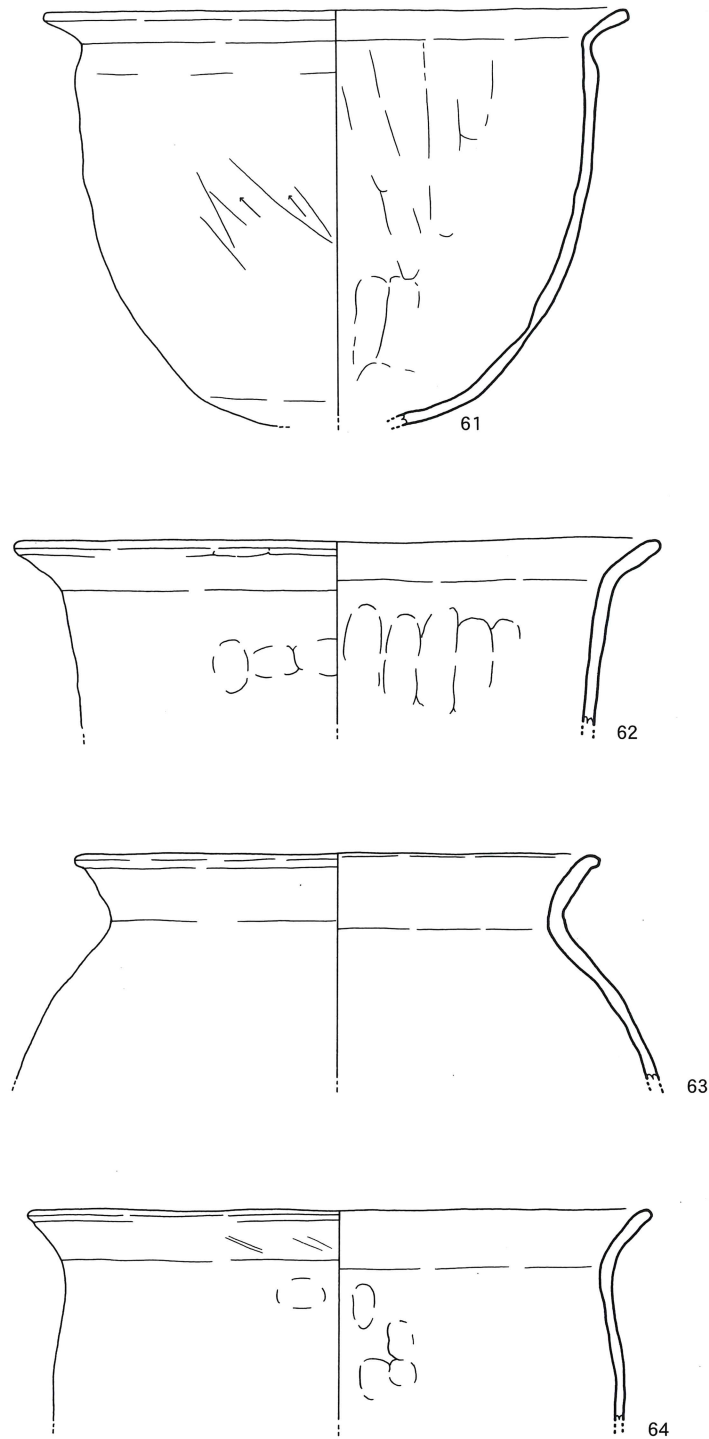
遺構の構成は、壁が立つ様に深く掘下げられ、掘り込まれた土坑を覆うように斜角をもった柱穴が土坑内に配される特殊な形をしていることから、何らかの焼成工房の様相を体している。

出土遺物1は、復元口径13.2cm、器高1.2cm、復元底径10.1cmを測る。また、出土遺物2は、復元口径23cm、出土遺物3は、復元口径25.0cmを測り、出土遺物4では、復元口径20.0cmを測る。

遺構の検出状況から、床面は平坦面を形成し、特に焼成痕は見られない。また、検出段階での平面では、焼成痕等を感じさせる焼土塊などが視認できたが、壁面にそれは確認できなかった。礫などが一括廃棄されていたが、これらにも焼成痕は見られなかった。



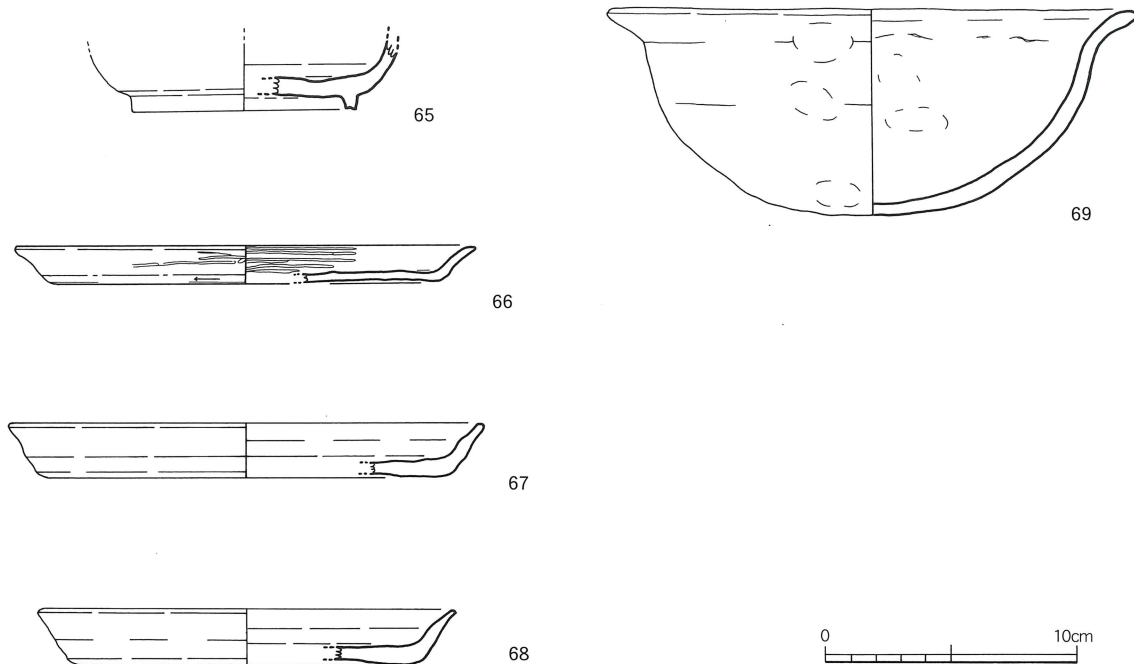
第38図 17号土坑図



第39図 17号土坑出土遺物

17号土坑が利用されていた時期には、特に焼成等工房的な要素に使用されていた可能性は低い。また、17号土坑が廃棄目的で作られたと考えた場合、遺構の形状から丁寧な作りから位置付けが困難である。

他の性格を考えた場合、壁面観察で確認された斜角を持つ柱穴の性格を考えると特殊な遺構である可能性が高く、隅丸方形を体する明瞭な遺構であることから性格を限定することは困難であるとする。周辺の地形もしくは遺構等を観察したところ、17号土坑の性格を決定付けるものは本調査区内では確認できなかった。



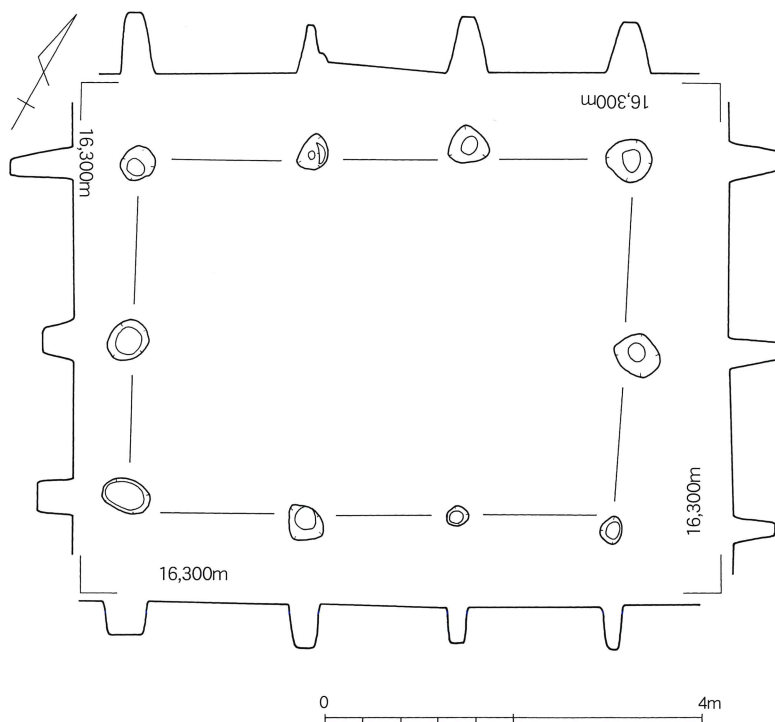
第40図 17号土坑出土遺物

3. 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡では、本遺跡で柱穴列によって区画が明瞭なものについて報告する。

(1) 1号掘立柱建物跡

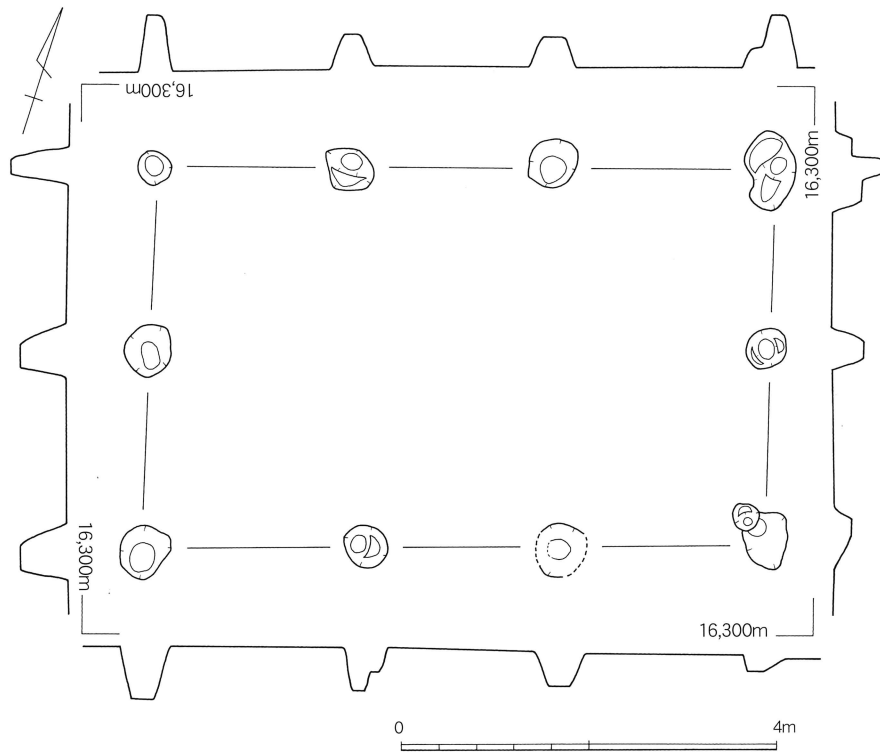
B区北側、1号溝を挟むように検出された。2間×3間で柱穴は直径40cm～45cm、深さは、40cm～46cm、柱間は、南北約200cm、東西約160cmを測る。柱痕は確認できなかった。



第41図 1号掘立柱建物跡図

(2) 2号掘立柱建物跡

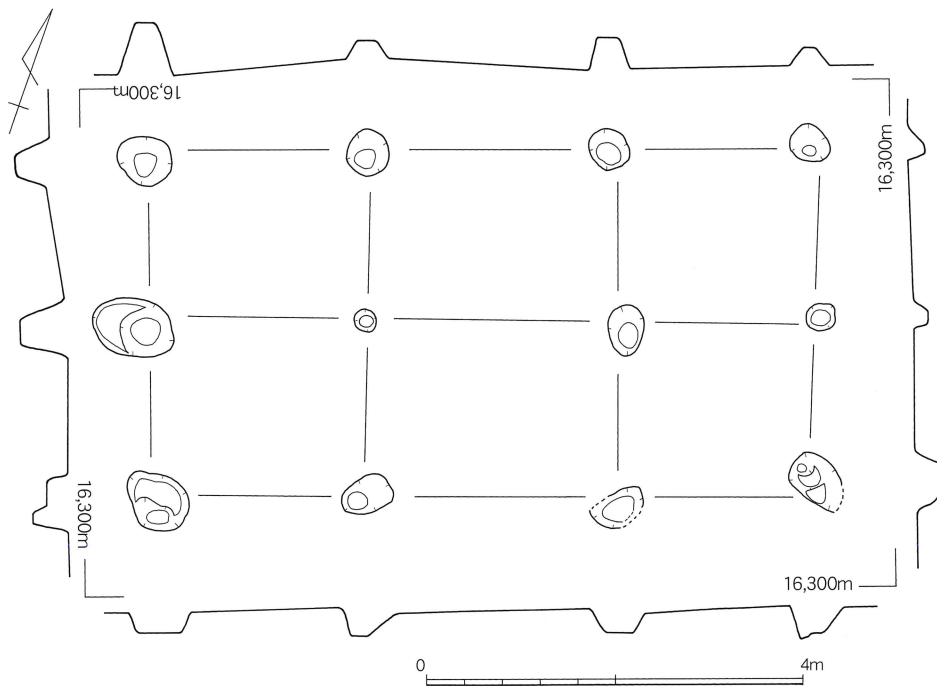
B区東側、3号土坑南で検出された。2間×3間で柱穴は直径45cm~60cm、深さは、40cm~80cm、柱間は、南北200cm、東西200cmを測る。柱痕は確認できなかった。



第42図 2号掘立柱建物跡図

(3) 3号掘立柱建物跡

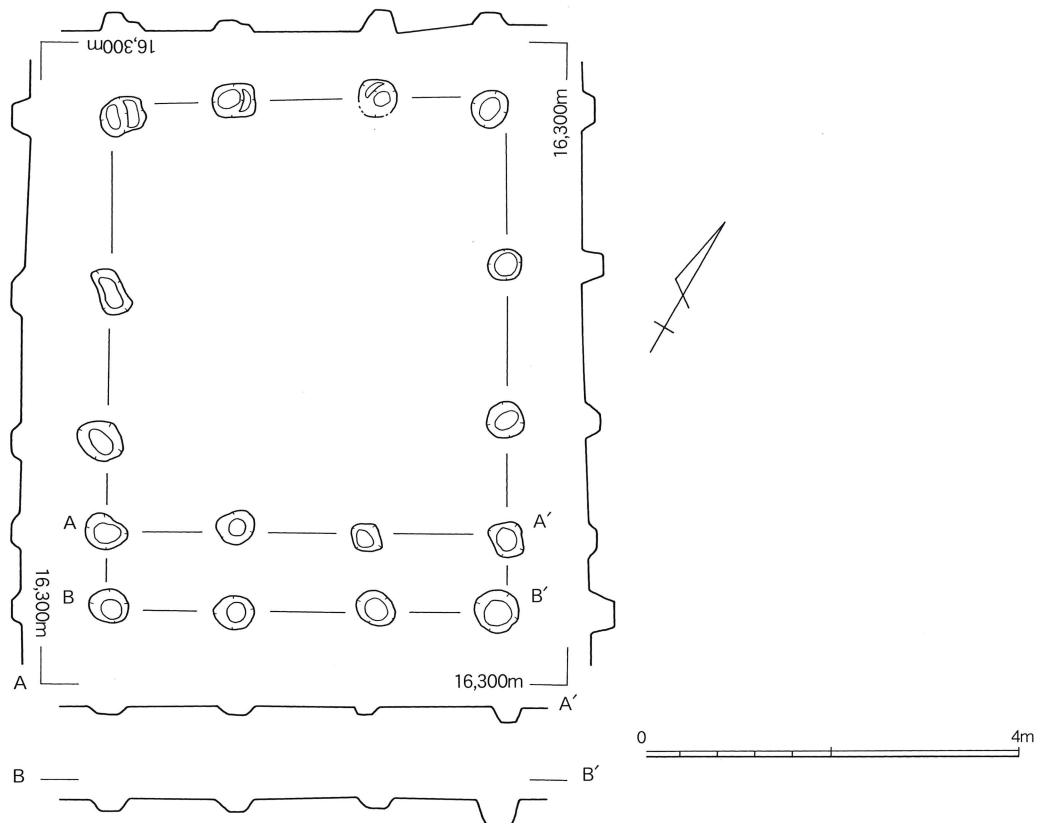
B区西側、4号溝東延長部分で検出された。2間×3間で柱穴は直径40cm~80cm、深さは、20cm~60cm、柱間は、南北200cm、東西10cmを測る。柱痕は確認できなかった。



第43図 3号掘立柱建物跡図

(4) 4号掘立柱建物跡

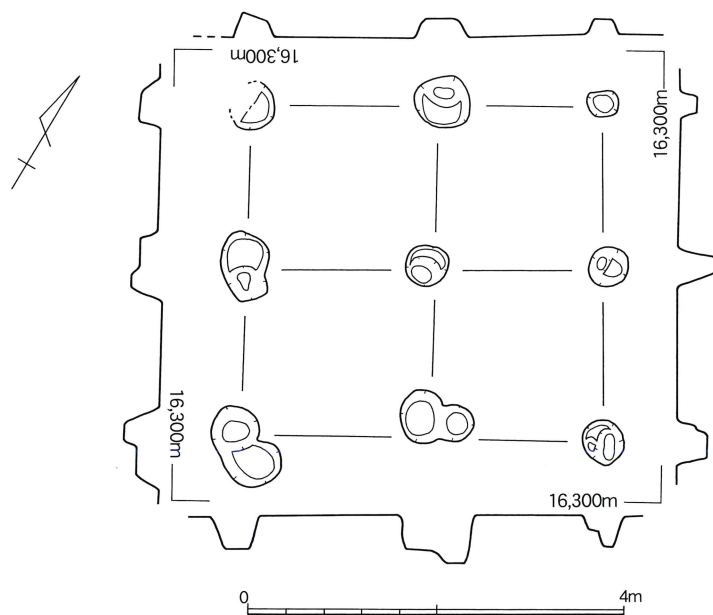
B区西側、3号掘立柱建物東側で検出された。3間×3間の半間の底が付く形で検出された。柱穴は直径40cm~45cm、深さは、20cm~35cm、柱間は、南北120cm、東西200cmを測る。柱痕は確認できなかった。



第44図 4号掘立柱建物跡図

(5) 5号掘立柱建物跡

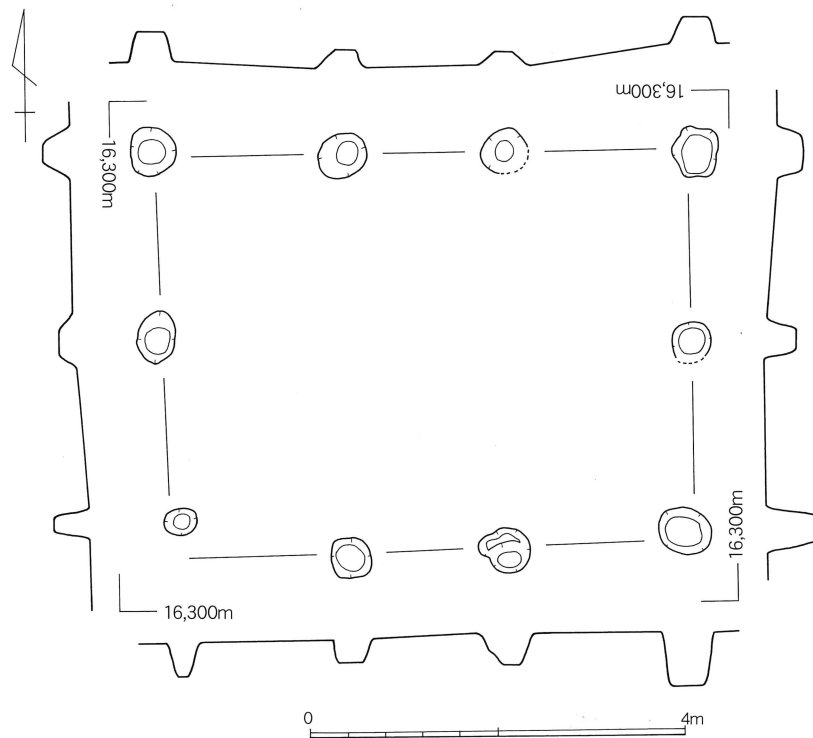
B区南側、4号溝東延長部分で検出された。2間×2間の方角を体する。柱穴は直径42cm~50cm、深さは、40cm~52cm、柱間は、南北200cm、東西200cmを測る。柱痕は確認できなかった。



第45図 5号掘立柱建物跡図

(6) 6号掘立柱建物跡

A区、北側で検出された。2間×3間で検出された。柱穴は直径40cm～46cm、深さは、40cm～60cm、柱間は、南北200cm、東西200cmを測る。柱痕は確認できなかった。



第46図 6号掘立柱建物跡図

4. 溝状遺構

本調査、A及びB区において、数条検出された。これらの溝状遺構は、中世団塊以降のものが主で、1号・2号また、A区北に位置する東西溝は、まさにそれといえる。出土した遺物等から、14C段階以降の遺構と考えている。

3号溝については、古い溝であろうと考えられるが、蛇行し、時期、機能等は不明である。

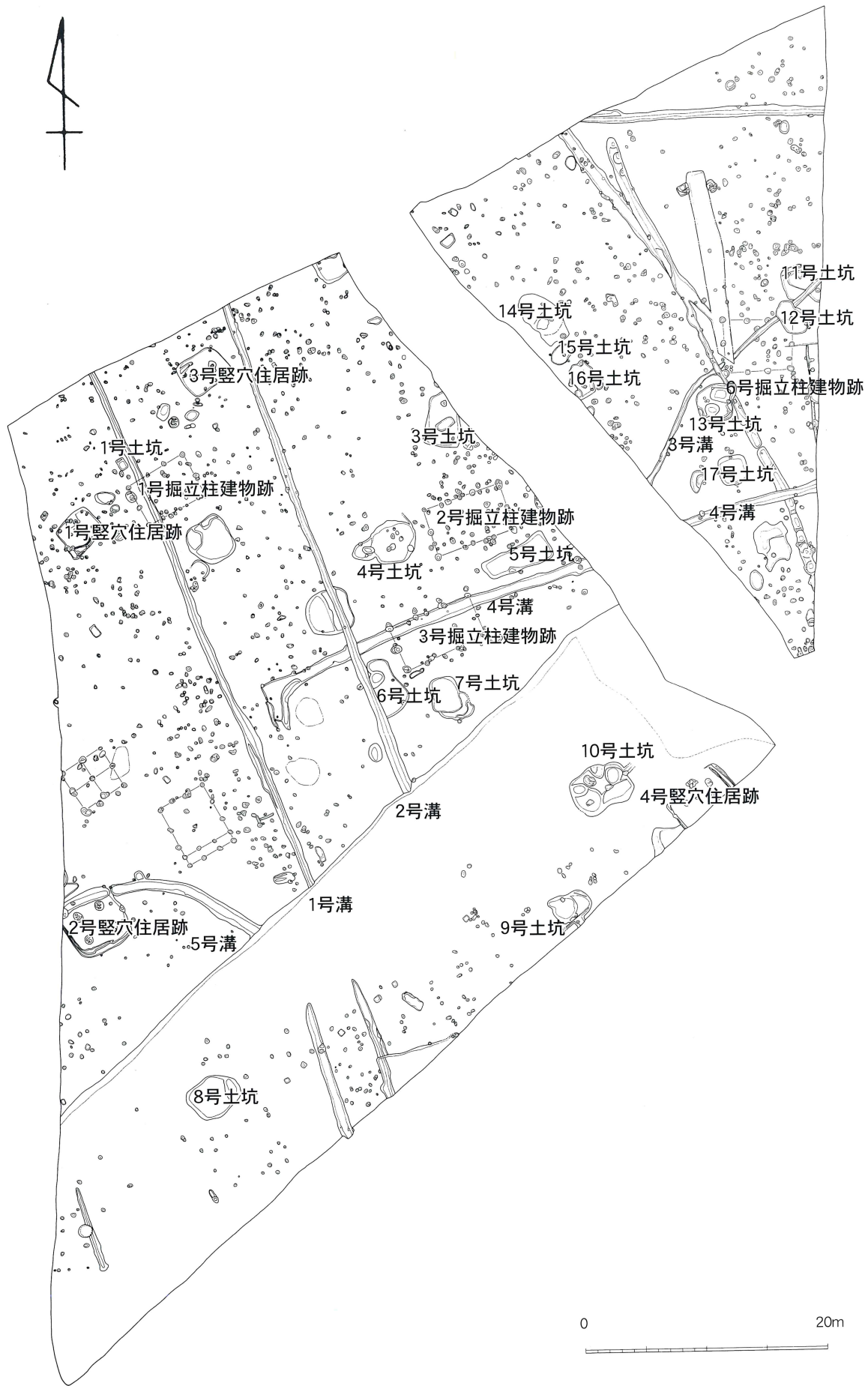
このほかの溝状遺構で注目したものは、A区を南北に走る溝で、13号土坑に切られる形で確認された。

溝の形状は不定形土坑が連続して作られることによってできたもので、灌漑施設の関連性が強い遺構と考えている。大分県内では、何箇所かの遺跡で連続不定形土坑として紹介されているものであるが、詳細は不明である。

本遺跡においては、下層に若干の水性堆積を見ることができたこと、この地域が、ある時期から農業を主たる産業として行ってきたことを考慮した場合の可能性の一つとしたい。

4号溝については、南方向に向かって大きな区画を形成しているものと考えている。しかし、土層の削平がひどく調査区南側においても溝の続きと考えられるものは確認できなかった。調査区東南に位置する犬丸天満社は、中世城館の一つであったことを考えると何らかの区画性を持った建物群が南に向かって展開した可能性も考えられる。

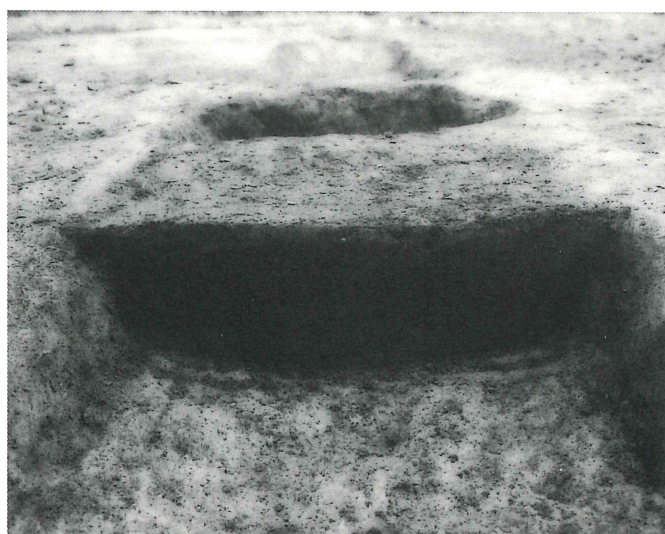
5号溝については、2号竪穴住居跡を切る形で検出されていることから、6～7C以降のものと考えられる。この溝も、第47図を参照すると、途中で集束し、連続する溝が西端で確認されている。連続する土坑ではないことから、何らかの溝であろうと考えているが、詳細は不明である。



第47图 野田遺跡全体図



溝検出状況



溝掘り下げ状況



両北溝掘り下げ状況



溝内出土遺物

第46図 溝状遺構写真

第4節 まとめ

野田遺跡では、中津市東部の洪積台地上において比較的まとまった範囲での発掘を行い、各時代における良好な資料を得ることができた。以下では、調査成果の概略を整理した上で、派生する諸問題について触れていきたい。

① 竪穴住居跡

竪穴住居については、方形または長方形の平面形態もしくはそれらの形状が復元できるものも含めて4軒を検出した。支柱穴は2箇所または4箇所、カマドの痕跡をもつものが3軒ある。総じて出土遺物が少ないこともあり、構築・廃絶の時期を特定することは難しいが、おおむね6世紀後半から8世紀にかけて展開したものであろう。しかし、調査区全体削平状態などを考慮すれば、さらに多くの住居跡が存在していたと想定される。

② 掘立柱建物跡

調査区内では、試掘当初の予想を超える密度で多くのピットを検出し、それらの検討から、6棟の建物を確認した。平面長方形の建物については、東西方向に主軸をもつものが4棟、南北のものが1棟で、いずれの建物も主軸角度が近接して揃った状態、又はほぼ直交する状態で配置しているのが確認できる。このほか、方形の総柱建物1棟も、上記の5棟と柱列の角度は近似している。よって建物群については、近接した時期内で複数の建物が展開していた可能性がある。あるいは、遺跡の立地する地形が、南の低地に向かって緩やかに下る斜面であったと考えられることから、それぞれの構築時期は異なっても自然地形による制約が建物の主軸決定に影響を与えた可能性もある。これらの建物の構造については、総柱の建物は高床構造であった可能性が考えられるが、側柱のみ又はこれに庇が付くものについては上屋構造が不明である。なお柱穴内出土遺物は、古墳時代（6世紀後半）が少量で古代（8世紀後半～9世紀前半）にかけての土師器・須恵器の破片が多くみられることから、建物の多くは後者の時期に構築されたと考えられる。

このほか検出された柱穴の中には、遺構の底面もしくは埋土中位にほぼ水平の状態で完形の須恵器の皿や杯が出土したほか、完形の土師器鉢のミニチュアが出土している。これらの遺物は、根石のように柱の受けとして使用されるような強度を有するものでないことから、建物の構築段階に伴うものとは考えにくく、柱材を抜き取った後の段階で意図的に埋置された可能性がある。このような出土状況は、建物の廃絶儀礼の痕跡を示すものであったとも考えられるが、本遺跡のみは断定できない。今後は、同様の出土状況の類例と比較・検討していくことで、具体的な埋納行為が復元できるであろう。

③ 飯鮎壺を多量に出土した土坑について

今回の調査成果のうちで注目すべきは、多量の土師器が集積した状態で出土した土坑である。これらの出土遺物のうち、圧倒的な量的主体を占めるのが、土師質の飯鮎壺である。本遺構の位置づけに関しては、改めて遺構の検出状況から確認しておきたい。

A区には、黒褐色土主体の遺物包含層が堆積していた。この包含層は、北部で最大30cm堆積しており、南に向かって薄くなっていた。包含層の構成遺物は、古代の土師器・須恵器を主体として一部に中世の土師質碗や少量ながら近世の陶磁器までを含むことから、その堆積は部分的な範囲を伴い複数期間にわたる所産であった可能性もあるが、結果として層位的に判別することはできなかった。しかし飯鮎壺のしゅっどした土坑では、遺構の掘り込まれた面が検出されるより10cm以上上位から、まず飯鮎壺の出土した土坑では、遺構の掘り込まれた面が検出されるより10cm以上上位から、まず飯鮎壺の破片に混じって土師器の甕の破片などが出土しはじめ、下層に行くにしたがって、飯鮎壺のみの構成となった。本遺構の上位またはその周辺では、A区包含層か全体からみても比較的浅い段階から非常に密度の高い状態で土師器等が出土していたことから、本来は水平検出による遺構内だけでなく、その上位のレベルに多くの遺物が盛り上げられた状態で放置されたものと想定できる。遺構

内は、非常に密集した状態で飯鮪壺が堆積し、上層ではバラバラの破片であったものが、下層にいくにしたがって、完形品またはそれらが割れた状態が多くなり、結果的には無傷の完形品が2個体出土した。土坑そのものは非常に浅く、遺物には焼土や灰または炭化材の破片が多く混入し、最下層では板状や枝の形を保った炭化剤が灰に埋もれた状態で出土した。地山に掘り込まれた遺構の壁面は、周囲に比べるとやや硬く締まっていたものの、赤変したり硬化するなど顕著に被熱を受けた痕跡はみられなかった。

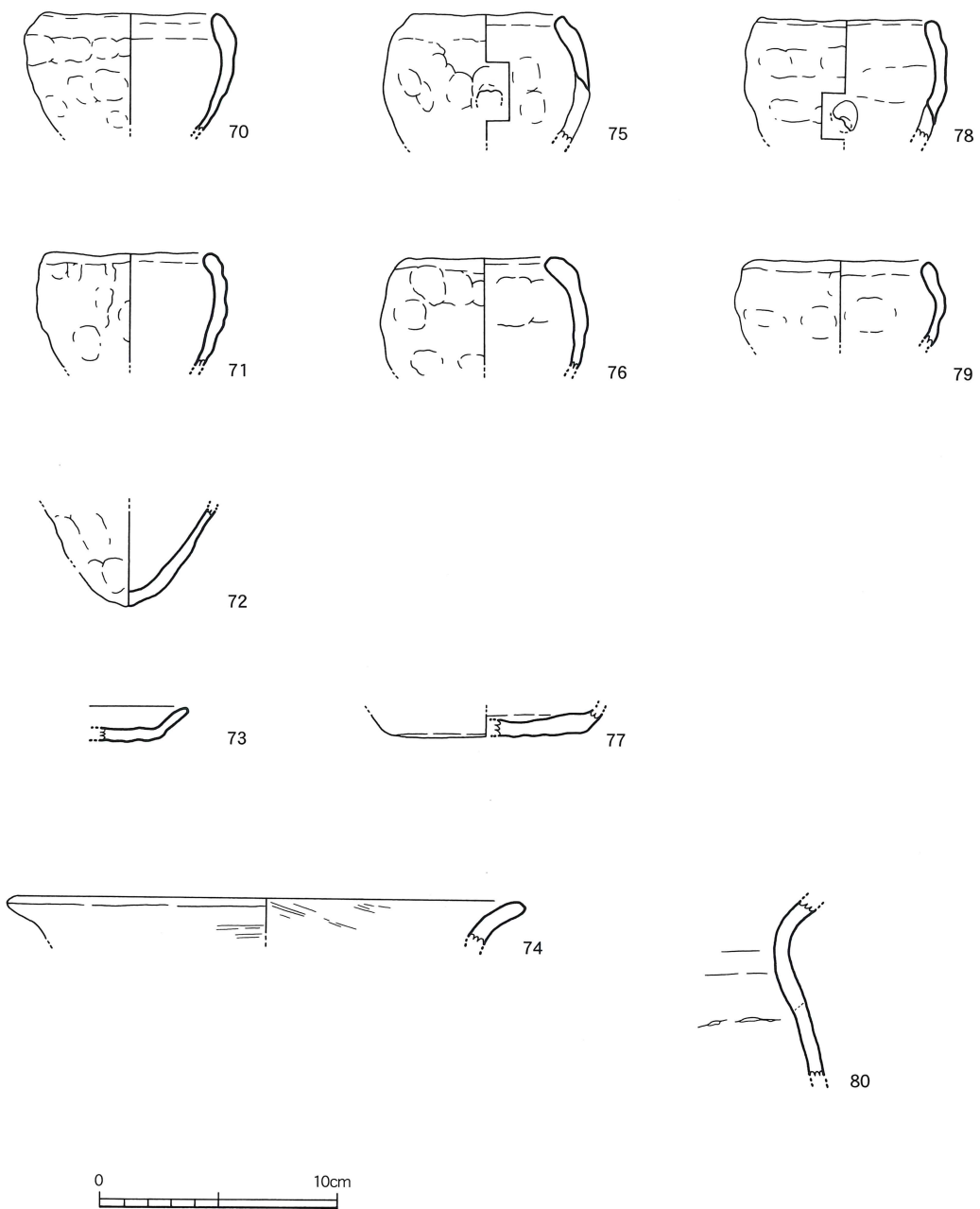
同じく中津市内に位置する定留遺跡八反ガソウ地区（註1）の発掘調査では、15基にのぼる鮪壺の焼成坑が検出されているが、それらの中には本遺跡のものと遺構の状態や遺物出土状況の近似したものがみられる。仮に本遺構が焼成坑であったと仮定すると、焼成の方法は、定留遺跡の例から想定された「野焼き（覆い焼）」のような方法であったと考えられる。ただし、定留遺跡との相違点を挙げるとすれば、本遺跡のものは、遺物の出土状況が「散乱」ではなく「集積」状態にあることと、破片から想定される個体としてはかなりの量（数十個体はあるか？）があることである。このことから考え合わせると、本焼成坑は、焼成時の燃焼が終わった時点で被覆していた粘土壁を除去した後、破碎していないものだけを選ぼうとしたものの余りに失敗品が多いため、集積した破片（とその下に埋もれていた僅かな成功品）についてはほとんど手を付けられないまま放棄された可能性を想定しておきたい。特に、出土した飯鮪壺の多くが非常に焼き締まった状態であったことが、逆に放置された破損品の多さを物語っているのかも知れない。また包含層から遺構上位にかけてみられた飯鮪壺以外の器種については、放棄された後に上器捨て場のような使用がなされた結果を示唆するとも考えられる。

出土した飯鮪壺については、形状を復元しうるほとんどの個体が到卵形を呈し、底が尖り気味で体部最大径が中位よりも高い位置にくるものであった。これらは、定留遺跡の報告で示された分類の中で、タイプ1またはタイプ2に該当する。また窄孔は、口縁部直下または胴部最大径の部分に2ヶ所みられ、いずれも口縁部から差し込んだ工具によって内面斜上方から開けられたものが多い。

④ 調査区内では、竪穴住居跡や小土孔のほかに、比較的大型の土孔が多く検出された。これらは、その形状も一定でなく、床面が平坦でありながら、そこではなく対面する壁面に柱穴がみられるみまや、2個の並立する立石の内側～床面に燃焼痕跡のみられるものが検出されたが、全体形状を復元できないため、住居跡から除外した。



第49図 野田遺跡垂直空中撮影



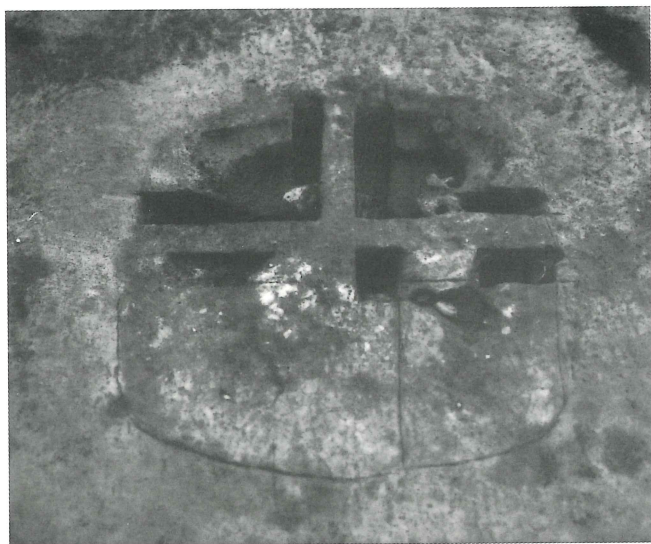
第50图 14号土抗出土遗物

小結

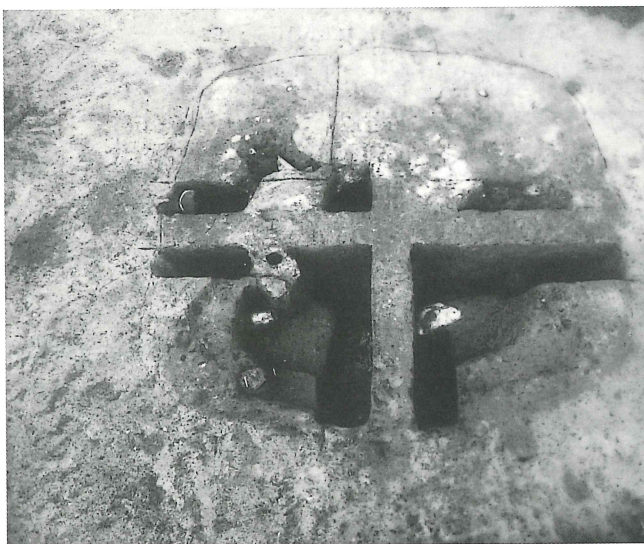
野田遺跡では、古墳時代から誇大にかけてのさまざまな遺構のほか、当時の生活環境を復元できるような資料が多く検出された。現状でみるかぎり、遺跡の中心的な時期は、古代である。この時期の物とみられる。竪穴住居跡、掘立柱建物跡、飯鮎壺を多量に出土した土孔を含む大型土坑群などからは、小規模な村落の姿を想像することができる。この時期の遺跡にしばしば追求される「官的要素」については、少なくとも遺物からはみられないことから、そのような機能を持った集落ではなかった可能性が高い。遺跡そのものは、定留遺跡は八反ガソウ地区からは直線距離にして2.5km、また現在の海岸線からも3.5km離れている。決して海岸に近い立地とはいえないながらも、漁村的な要素がみられたことは、集落の性格を考えていく上で、看過できないであろう。同じ台地上には、北側に隣接して上畑成遺跡、そのすぐ北側に鳥遺跡が位置する。またやや離れて南には、北小枇杷遺跡、馬下遺跡がある。今後はこれらの遺跡との比較・検討などによって本遺跡の位置づけがさらに明確になるであろう。

犬丸川まで600mほど、中尾城までは500m

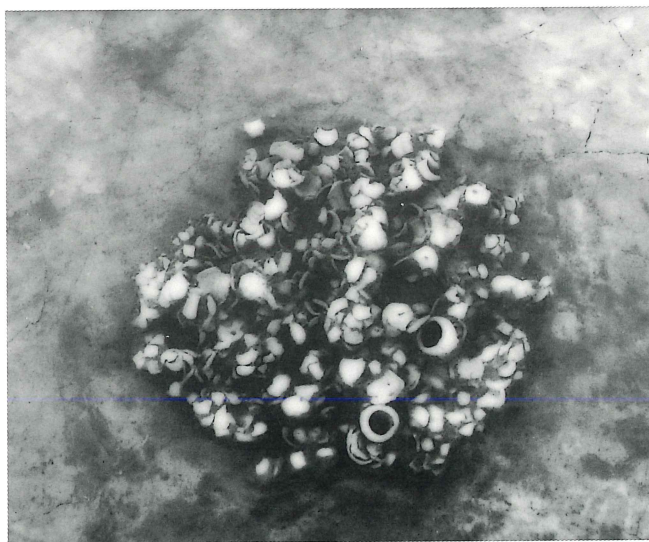
(註1)高崎章子 2006 『定留遺跡 八反ガソウ地区』 中津市教育委員会



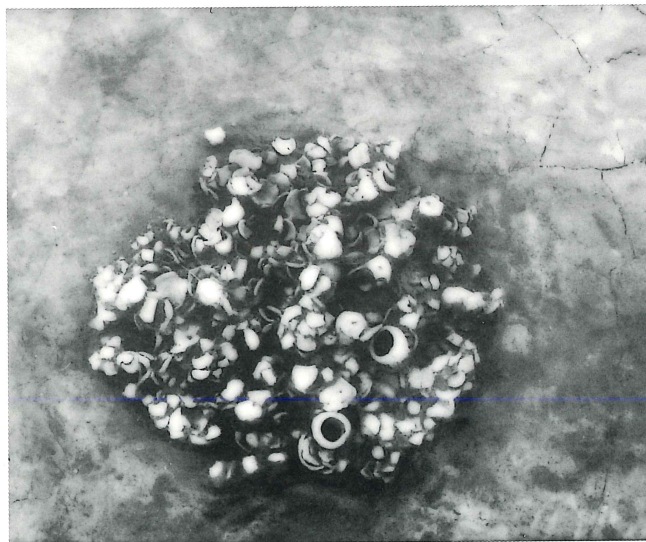
17号土坑掘下げ状況 ①



17号土坑掘下げ状況 ②



タコ壺 出土状況 ①



タコ壺 出土状況 ②

第4章 北小枇杷遺跡

1. 発掘調査の概要

北小枇杷遺跡は大分県中津市大字犬丸に所在する。中津市東南の下毛原台地と呼ばれる洪積台地上に位置し、周防灘へ向かって北東方向に流れる犬丸川を南に見下ろす台地の斜面に立地する。台地の斜面には、南北両側から落ち込む谷状の地形が西から東へと緩やかに傾斜しながら続いており、この谷部において南北約20m、東西約30mの範囲にわたり遺物包含層が堆積していた。

調査区は圃場整備によって標高約14m付近で上部を大きく削平されており、表土直下から約50cmにわたり現代の耕作土が堆積していた。調査対象としたのは現代の耕作土下のⅠ～Ⅲ層である(第 図)。Ⅰ層は茶褐色粘質土で、最も多くの遺物が出土し、中世段階の遺物が目立った。Ⅱ層は暗茶褐色土で、Ⅰ層に比べ含まれる遺物の量は少ない。Ⅲ層は砂層で、出土した遺物は1点のみであった。最下層が砂層であることから、遺物包含層が堆積している谷状の地形は自然流路であったと考える。またⅠ・Ⅱ層では、時期の異なる遺物が一層中に混在して包含されている状態であったことから、この遺物包含層は大きく三段階に渡って二次堆積したものとと言える。

2. 出土遺物(第3～6 図)

北小枇杷遺跡から出土した遺物は、その多くが小片であり、激しく摩滅していた。以下には図面上で復元可能であった遺物を提示する。

1は下城式土器の甕の口縁部である。口縁部下に刻目突帯を一条巡らすもので、弥生時代中期前半のものである。2、3は弥生時代中期～後期の甕の底部である。4、5は土師質の高坏脚部である。

6は須恵器蓋。6は口径が9.4cmと小さいが、6世紀中頃に比定できる。7は扁平な天井部に扁平なツマミが貼り付けられている坏蓋。8世紀後半の遺物である。

8、9は須恵器坏の底部である。9は底部から体部にかけてやや角張って屈曲し、直線的に立ち上がる。8世紀前半の坏の特徴を持っている。

10～13は須恵器の高台付坏。10は体部と底部の境が丸みを持ち、体部から口縁部にかけてやや内湾気味に立ち上がる。高台は底部と体部の境よりも内側につく8世紀前半のものである。11は、やや立ち上がりが直線的であり、8世紀中頃に下る可能性がある。13は高台が底部と体部の境につき、底部と体部の境は屈曲せずに丸みを帯びて立ち上がる。9世紀前半の特徴である。

14、15は須恵器_の口縁部であろう。

16～23は大形甕。16、17は大形甕の頸部片で、外面に櫛描波状文を施文している。18、19は頸部から口縁部へ「ハ」の字状に開き、口縁部端部が肥厚する。20、21は口縁部端部が上方に面をもつ、8世紀前半～中頃のもの。22、23は口縁部が短く外反し、端部は丸みを帯びて肥厚している。8世紀後半～9世紀前半の特徴である。19～23はいずれも、胴部には外面にタタキ後カキ目調整もしくは回転ナデ、内面に青海波文が認められる。

24は土師器甑の把手。25は底部に焼成前穿孔がある変形の蛸壺と考える。器壁は薄く、法量も小さい。26、27は鞆の羽口。被熱により変形している。28は土師質の鉢の底部である。

29～31は土師質の土鍋である。29は口径に比べて浅い体部をもち、頸部で「く」の字状に屈曲する。口縁部が1.9cmと短い。30は頸部で鋭く屈曲した後、口縁部が内湾しながら外方に広がるタイプで、13世紀代のものと考えられる。32は瓦質土器の土鍋で、口縁部下に断面台形の突帯を有する。色調は灰色である。

33、34は土師質の脚付鍋の脚部である。

35～39は瓦器_の底部である。高台の断面が方形のもの(35)と、高台径が狭く、断面が三角形の低い高台を持つもの(38、39)とがある。13世紀前半～中頃のものである。

40は白磁碗の底部からの立ち上がり部分の破片で、下半は露胎である。41は白磁碗の底部片である。底部内面に段を持ち、口縁部は玉縁状を呈するものと思われる。40は12世紀、41は12世紀前半のものである。

42同安窯系青磁碗の胴部片。外面に縦方向の櫛目文、内面にジグザグ状の点描文を有する13世紀代のもの。

43～45は龍泉窯系青磁碗片。43は外面に鎬蓮弁文を持つ。蓮弁の幅が広く、肉厚で鎬が明瞭であり、13～14世紀のものと思われる。44は内面に文様をもつ。14～15世紀のものである。45は外面に幅狭く蓮弁文を線描きする、16世紀のものである。

3. まとめ

出土遺物は大きく、弥生土器、8世紀～9世紀代の須恵器・土師質土器、13世紀代の瓦器や鍋類・陶磁器類という三時期に集中する。弥生土器は出土量が少ないために明確な器種構成は不明だが、須恵器や土師質土器等に関しては同時期の供膳具、煮炊具が出土している。従って、少なくとも奈良～平安時代と室町時代時代には周辺で集落が営まれており、また北小枇杷遺跡の立地上、集落は遺跡の北西に広がる丘陵部に存在していたと推察できる。

参考文献

岩崎仁志1988「防長地域の足鍋について」『山口考古』第17号 山口考古学会

佐藤浩司1987「奈良時代の須恵器と土師器―旧豊前国を中心として―」『東アジアの考古と歴史 下』岡崎敬先生退官記念論集同朋舎

佐藤浩司1991「旧豊前国における古代末から中世前期の土器様相」『中近世土器の基礎研究 VII』日本中世土器研究会 谷口俊治
1989「豊前地域の中世雑器―山陽道西部地域の設定に向けて―」

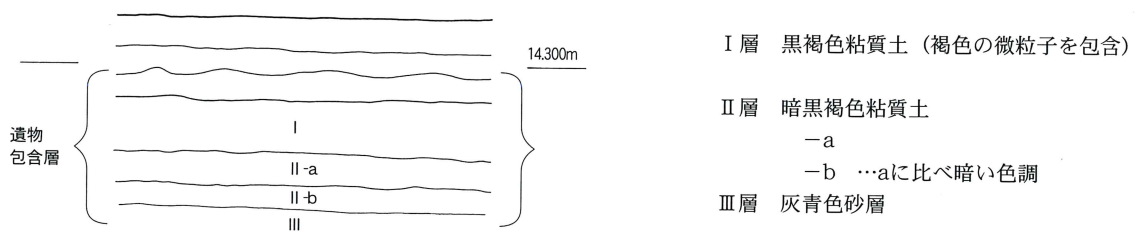
『研究紀要―第3号― (埋蔵文化財調査室開設10周年記念特集号)』財団法人 北九州市教育文化事業団 埋蔵文化財調査室

中津市教育委員会1997『犬丸川流域遺跡群 犬丸川中小河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』中津市文化財調査報告書
第19集

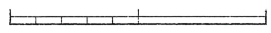
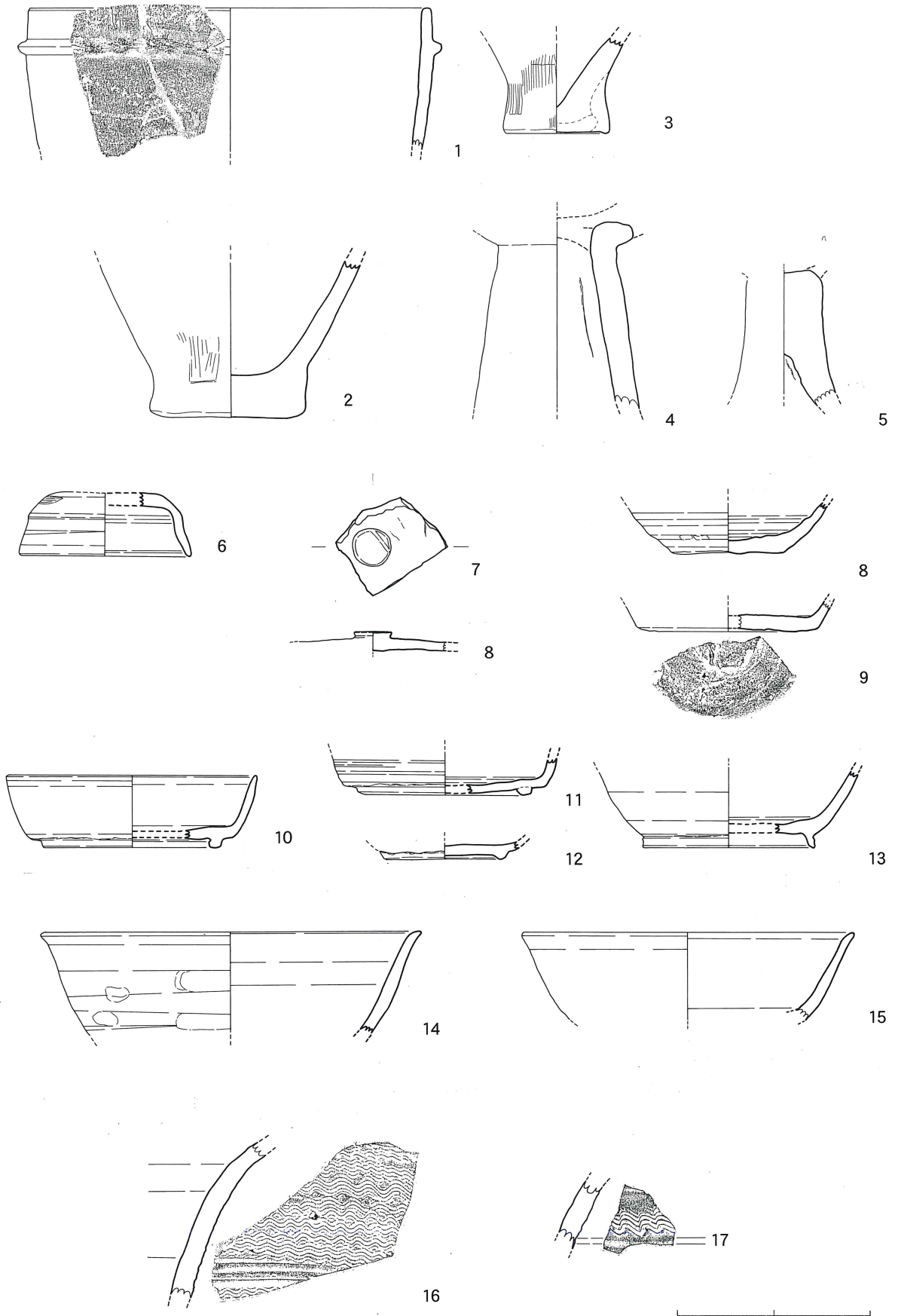




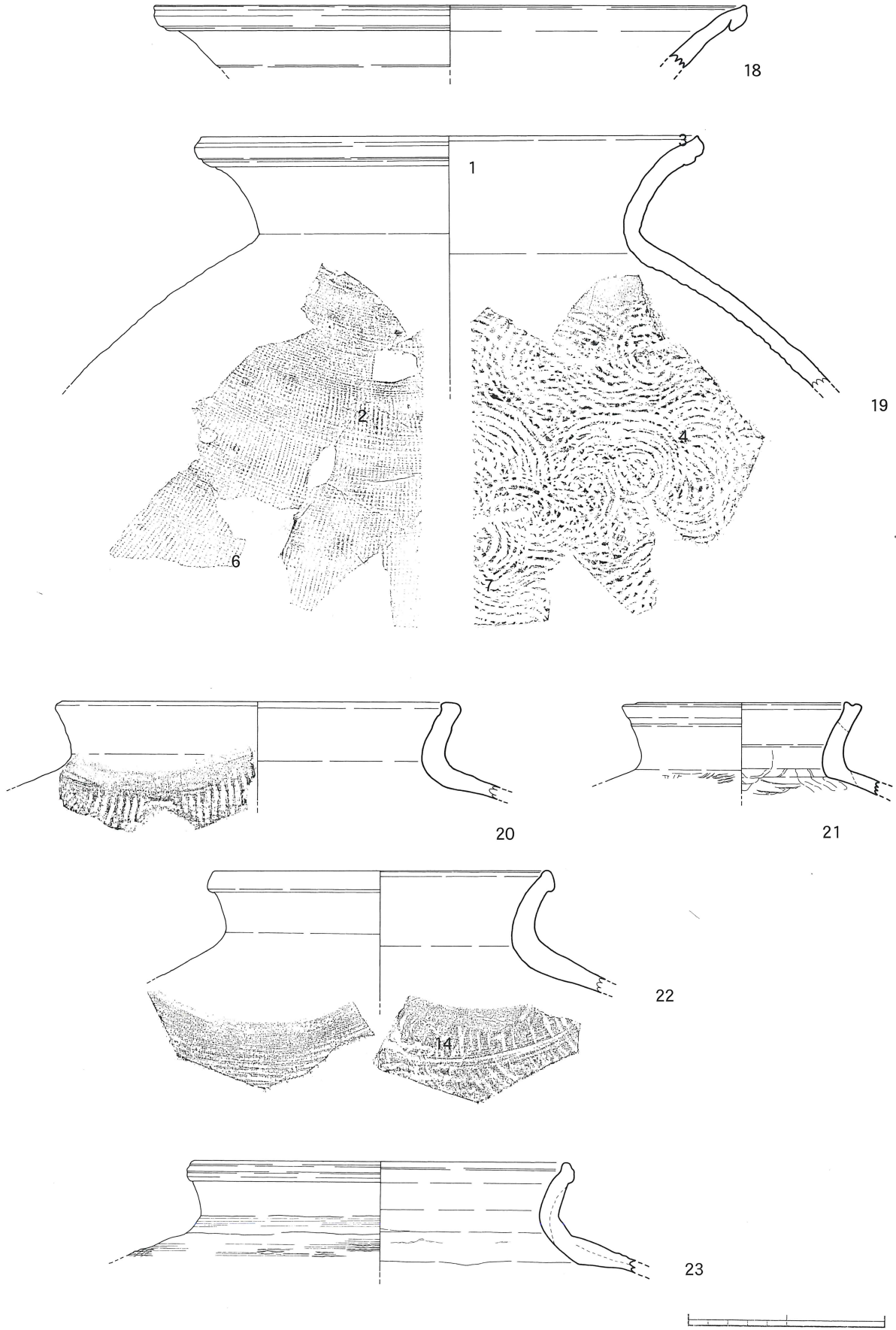
第1図 調査区全体図



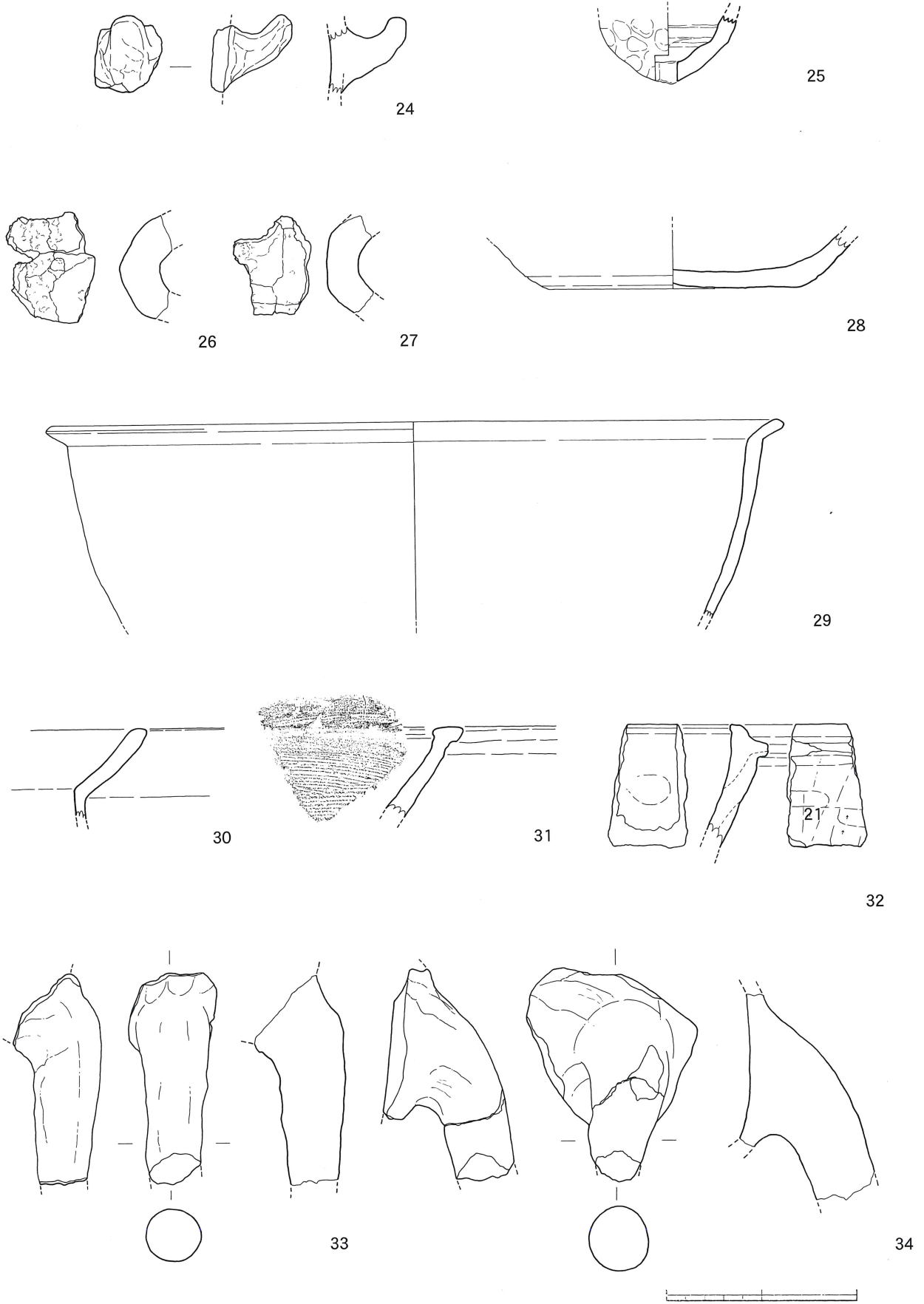
第2図 基本土層模式図



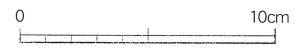
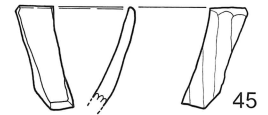
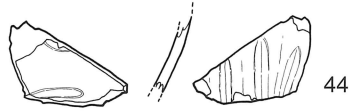
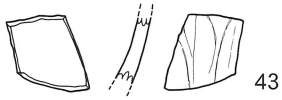
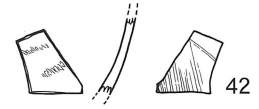
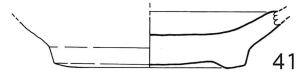
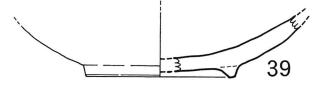
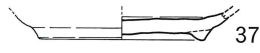
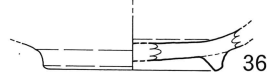
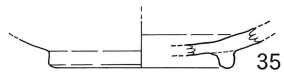
第3図 出土遺物 (1) (S=1/3)



第4図 出土遺物 (2) (S=1/3)



第5図 出土遺物 (3) (S=1/3)



第6図 出土遺物 (4)



完掘状況



土層写真

報告書抄録

フリガナ	キタコピワイセキ・ノダイセキ
書名	北小枇杷遺跡・野田遺跡
副書名	国道212号中津道路道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第17集
編著者名	高橋 徹 ・ 恒賀 健太郎
編集機関	大分県教育庁埋蔵文化財センター
所在地	〒870-1113 大分県大分市大字中判田ピアノ門1977番地
発行年月日	平成19年 3月30日

フリガナ 所収遺跡名	所在地	キタコピワイ		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査要因
		市町村	遺跡番号					
キタコピワイセキ・ ノダイセキ	中津市大字犬 丸字北小枇杷			33°	131°	20040517	北小枇杷 遺跡	道路建設
				33°	131°			
北小枇杷遺跡 野田遺跡	中津市大字犬 丸字正連寺・ 野田			34′	14′	～	600㎡	
				33′	14′		2,000㎡	
				00″	53″	20041015		
				50″	57″			

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
北小枇杷遺跡	散布地	弥生～中世		弥生式土器 須恵器	
野田遺跡	集落跡		溝6条 土坑多数 柱穴多数 掘立柱建物5棟 竪穴式住居4基	土師質土器 須恵器 瓦質土器 青磁 蛸壺	

北小枇杷遺跡・野田遺跡

国道212号中津道路道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書
平成19年 3月30日

発行 大分県教育庁埋蔵文化財センター
印刷 (有)印刷 良栄堂